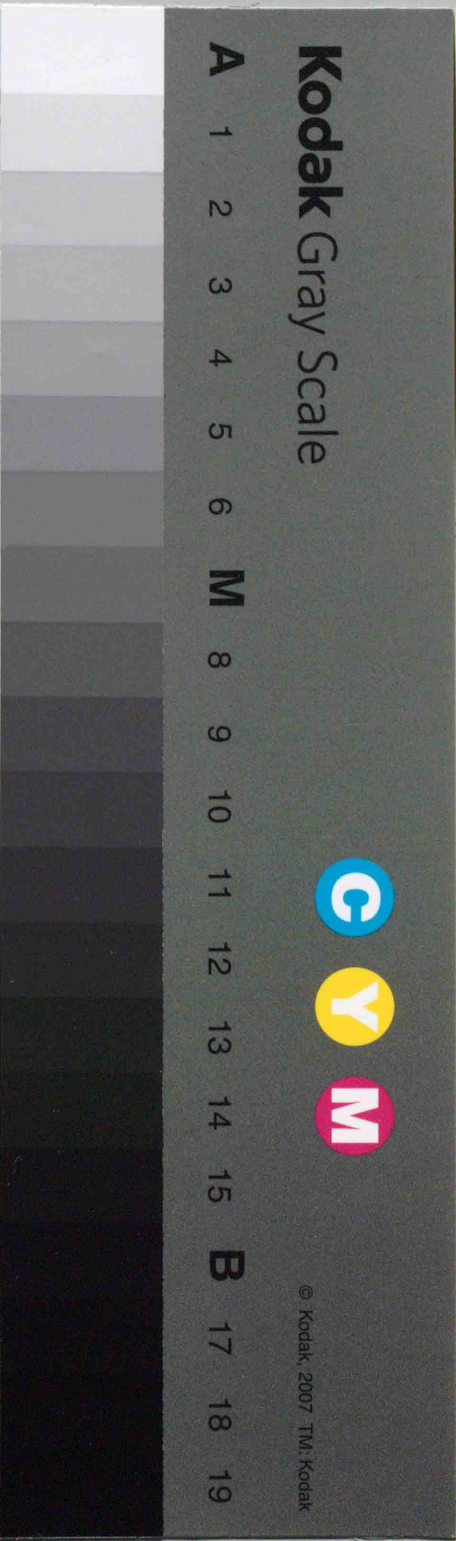
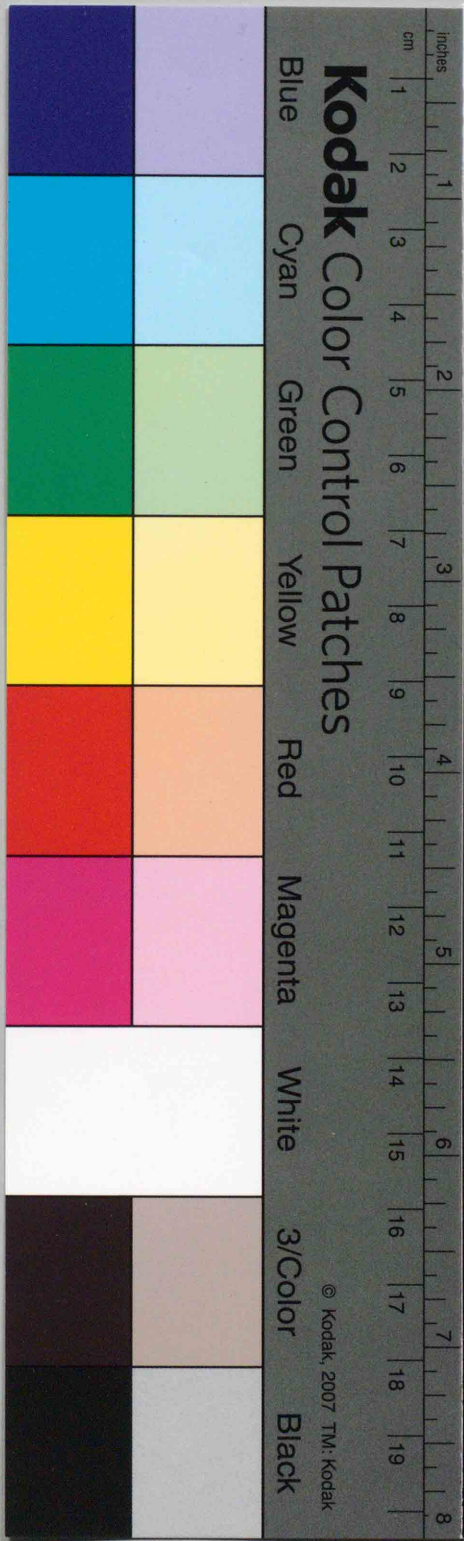


中等國語讀本
落合直文編
卷七

四年級
賀川正之

375.9
Oc8
資料室

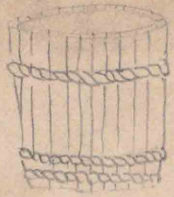


30296 ✓
教科書文庫
3
810
41-1902
200030
1973



375.9
141 008

大蔵書

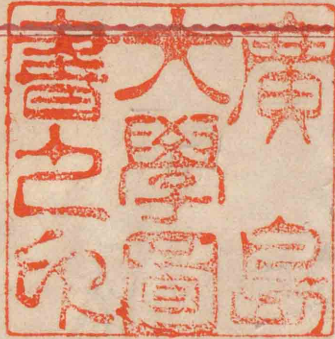


中等國語讀本卷七目次

正堂

一、賴山陽及びその著作その一	一
二、賴山陽及びその著作その二	五
三、賴山陽及びその著作その三	九
四、叙事詩人としての巢林子	一四
五、笠置山	二〇
六、砲のひびき	二三
七、落花の雪	二六
八、東關紀行の一節	三一
九、城墟感懷	三七

中等國語讀本卷七目次



一〇、芳野の行宮その一	四〇
一一、芳野の行宮その二	四三
一二、吉水院	四七
一三、建武中興論	五〇
一四、勅諭	五四
一五、如意輪堂	六七
一六、小楠公(今様)	七二
一七、熊王發心	七三
一八、空行く雁	七八
一九、懷舊(短歌)	八二
二〇、昔話四章	八三

一、登仙法師	八三
二、斷食法師	八六
三、連歌法師	八八
四、弓取法師	八九
一一、尼法師その一	九一
一二、尼法師その二	一二
二三、短篇四章	一九
一、杜鵑を聞く記	一九
二、鯉の圖に題す	二〇
三、魂祭の題辭	二〇
四、碓を聞く詞	二一

一一四 運命……………一一一
 一二五 天才の末路その一……………一二四
 一二六 天才の末路その二……………一三〇
 一二七 天才の末路その三……………一三四

中等國語讀本卷七

一、 賴山陽及びその著作 その一

德川氏の季年スエは、それ猶、歐洲十七世紀の末葉の如きか。彼
 にありては、古文辭スエ、その盛行の極に達したるも、近世國語の
 文辭は、猶、幼稚を免れず。我にありては、戰國の餘習、既に、脱し
 て、文教は、靡然として、海隅に遍く、漢土の儒學詞藝、その秀を
 鍾めて、その萃を抜きたるも、わが近世文學は、纔に、その萌芽
 を發したるのみ。この時にあたり、蓋世の偉才、いできて、以て、
 わが文學を振ひたらむか、その風動は、全國に影響して、到る



徳川氏季年
 猶、幼稚を免れず
 我にありては
 戰國の餘習
 既に脱して
 文教は靡然として
 海隅に遍く
 漢土の儒學詞藝
 その秀を鍾めて
 その萃を抜きたるも
 わが近世文學は
 纔にその萌芽を
 發したるのみ
 この時にあたり
 蓋世の偉才
 いできて
 以てわが文學を
 振ひたらむか
 その風動は
 全國に影響して
 到る

挑撥 イ、トシテ、ク、ラシム

反激 カ、キ、カ、キ、カ、キ

圃畑 ウ、ハ、タ、ノ、

文學 リ、テ、キ、ク、ノ、

文運 リ、テ、キ、ク、ノ、

詩人 シ、ノ、ヒ、ト、

張本 チ、ノ、ヒ、ト、

張本 チ、ノ、ヒ、ト、

ところに行はれ、或は、獎勵せられ、或は、誘導せられ、或は、挑撥せられ、或は、反激せられ、才俊の士は、彬々として、輩出し、以て、文藝の圃に遊び、わが文學の黄金時代は、必ず、三、四十年前に來り、しならむ。

つらつら、各國文運の振興を考ふるに、その先をなすものは、大抵、詩人ならざるはなく、その衰を振ふもの、また、詩人ならざるはなし。チーサー、スペンサー、ミルトン、シェーキスピアの、英文學ににける、ユルチーユ、モリエール、ラシーヌの、佛文學ににける、ゲーテ、シルレル、レッシングの、獨逸文學ににける、ダンテ、ペトラークの、伊太利文學ににける、皆、然らざるはなし。さては、わが文學を振ふ張本も、また、これを、詩人に求

めざるべからず。

余は、古體詩家ににいて、眞淵、景樹二翁を得、近體詩家ににいて、近松、竹田二叟を得たれども、出づる、或は、その時を得ず、才、或は、その器に盈たず、學、或は、その道に適せず、力、或は、その量に叶はず、その勢力の及ぶところ、カ、キ、カ、キ、カ、キ限極するところあり、未だ、文學の全般に向ひて、その積衰を振ふこと能はざりき。余は、彼の諸家の外に、才學、力量、すべて、その權度を得て、カ、キ、カ、キ、カ、キ志かも、恰當の時世に遭遇しながら、稀世の偉才を抱きて、その用處を誤り、日本文學の泰斗たる名譽を得そこなひ、徒に、史家なり、策家なり、文家なり、詩家なりといはれたるのみにて、冠するに、絶世絶代の文字を以てせらるゝに至らず、彼の、萬能達

恰當 チ、カ、ウ、
 泰斗 チ、ウ、ト、
 策家 サ、ク、カ、
 文家 ブ、ン、カ、
 詩家 シ、カ、
 冠 カ、ン、

古體詩家 コ、テ、イ、シ、カ、
 近體詩家 キン、テ、イ、シ、カ、
 眞淵 マ、ク、ヒ、
 景樹 ケ、イ、ジュ、
 近松 キン、ソウ、
 竹田 タケ、タ、

して、一心足らず」とかいふ如き、嘲をも受くるに至りたる、人物を發見し、未だ曾てその人とその才とを痛惜せずばあらず。余は今日、世人が猶その人を崇拜するを見て、いさゝか自ら慰むるところなきにあらずといへども、退きて、再びこれを考ふれば、更に深く惜むところなくばあらず。その人は誰ぞ。山陽頼氏、これなり。

「詩は、別才なり」といひ、「詩人は、生る、成るにあらず」といふは、東西一致の金言なり。今、山陽の一生を考ふるに、その性格といひ、その言行といひ、その著作といひ、一として、詩ならざるはなし。その童時にあたり、夙成を以て、老博士を驚したるは、詩なり。その父母を懷ふにあつく、その王室を懷ふにあつく、

採集したる...

東洋 西洋

夙成 早より上達する事

君子の言行を懐ふに...

北馬南船 北馬南船は北馬南船の詩なり。...

その忠臣義子を懷ふにあつく、その天下國家を懷ふにあつく、情の熱するは、常に、理の冷なるに勝ちたるは、詩なり。その北馬南船、行李、れるさゝるところなく、春花秋月、遊展あまねからざるところなかりしは、詩なり。その畛域を撤して、諸生を待ち、禮貌を外にして、王公に接したるは、詩なり。山陽の性格、言行、誰か、これを詩にあらずとせむ。

二、頼山陽及びその著作

試に、その著作の史編を視よ、政記の一書は、もとより、多とするに足らず。外史、何の取るところぞ。その議論は、平凡のみ。その事實は、謬誤のみ。その體裁は、偏失のみ。されども、その筆

史編 (歴史) 外史 (外史) 偏失 (偏失)

墨の靈妙活動

華軍士 支那 中等國語讀本卷七

叙事、在し事實ヲ述ブ

疎 アラマシ

或は、細々 細々

俯仰低徊 フウエウテイヘイ

感慨淋漓 カンカイリンリ

博搜 ハクサウ

或は、博搜 博搜

墨の靈妙活動、殆ど天馬の空を行くが如き趣あり。叙事、或は精、或は疎、或は長、或は短、精にして長なるときは、微として、穿たざるなく、細として、及ばざるなし。疎にして短なるときは、或は、脈々の餘情を含み、或は、婉々の餘韻を存す。戰爭を叙すれば、讀者をして、汗を握らしめ、別離を叙すれば、讀者をして、涙に咽ばしむ。志かして、その叙論の如き、俯仰低徊、感慨淋漓、まことに、讀者をして、一唱三歎せしむるものあり。これらの文字、これらの思想、果して、いかなる天才より流出するものぞ。その題目を撰びては、源平以後の戰爭記を採りたるが如き、その事實に依りては、博搜旁引と明證確説とを主とせず。専ら、その文筆を靈動して、讀者を感激せしめむとしたるが

市糶 市糶

邊防 邊防

迂疎空濶 迂疎空濶

中等國語讀本卷七

如き、ことに、王室と忠臣とを思ふ情の切なるより、正記を出すづる標準、定らず、その體裁に、前後の矛盾を來せるが如き、半生の精力を費して、編述したる二十二卷の外史は、看來れば、一篇無韻の叙事詩たるのみ。

試に、その論策文章を視よ、民政といひ、市糶といひ、水利といひ、邊防といふ、迂疎空濶、實用に施すべからざるものゝみなれども、その熱情の溢れたる、その文勢の壯なる、驚くべきものあり。志かして、外史以前の文章につき、その精華を求むるに、寸鐵、人を殺す妙、多くは、小品の文字にあり。その形體は、すなはち、論策たり。文章たり。その本質は、すなはち、想像のみ。詩詞のみ。

去りて、その詩を視よ、雄健なるものあり、典雅なるものあり。適麗なるものあり。輕妙なるものあり。志かして、その最も長ぜしは、歌行にあり。樂府にあり。料を、史傳に取りて、これを詩詞に寓したるにあり。こは、山陽も、自ら、得意とせしところにて、余不欲詠物、詠物不若詠史、史中有無數好題目、隨讀者淺深皆可成眞詩」とは、その平生の持論なりきといふ。また、以てその才の、日本文學を振ふに足りしを見るべからむ。

余曾て、その戯に作れる今様を讀み、その跌宕飄逸れのつから、不群の趣あるに服せり。この詩才に加ふるに、彼の史傳の嗜好を以てし、馳驟縱橫、奇想を、天外に飛し、その事實に拘泥せず、演義述作するところあらしめば、その造詣、何ぞ、彼の

花ありあしる。ヤエしり、
春の曙見取せば
あらしり人も、こころを
人の心はたふさぐべし。



如くにしてやまむや。わが史傳は、未だ、多く、題詠に入らず、潜心、好案を求め、研精、妙句を探り、その外史に灑ぎたる心血を傾倒して、これを、詞賦に注がむか、嚴然たる叙事詩を作りて、わが文學界を風靡せむこと、蓋し、難からざりしならむ。然るに、漢土の詩に倣して、固有の天才を、矮縮し、經濟の學に志を奪はれて、専ら、功力を詩に用ゐざりしこと、かへすがへすも、惜むべきかな。

三、 賴山陽及びその著作 その三

余が、山陽の、専ら、詩人とならざりしを惜む理由、頗る、多し。今、これを擧げむか。詩は、別才なり。志かして、詞才敏妙、その天

稟に出づ。これ、その一なり。詩人は、料を取るに、自ら、新エマ新機軸を
求むべし。まかして、史傳を以て、材とすること、その卓識に發
す。これ、その二なり。詩人は、愛情の熱肺腸なかるべからず。ひんくみしり
かして、尊王の誠と、忠臣義士を思ふ情とは、面にあふれて、背
にあまねし。これ、その三なり。

かくて、余が、特に、表彰せざるべからざる第四の理由あり。
余、曾て、江木鱗水の作りたる山陽先生行狀を讀み、その「常日、
謂我才子、未悉我者也、謂我能刻苦、眞知我矣」といふに至り、私
に、その實を失へるにあらざるかを訝りしが、後、彼の「前兵兒
謠」並に、「蒙古來」の原稿を觀るに及び、その苦心經營、一句も、苟
もせざりし實迹を審にし、かつ、その古賀穀堂を訪ひ、はじめ

その千言立成の敏才に驚きしも、數月を隔て、再び訪ひた
る時、その文稿は、依然として、改刪するところなかりしを觀
て、こゝに、與し易きのみ後の念を起したりといへる逸事を聞
き、その意匠、シヤウ慘愴、コノカ勉勵、刻畫の勞を厭はざる耐忍あるを明認
し、そゞろに、景慕の情を催したり。蓋し、創意の才は、必ず、刻畫
の力と相待ちて、後、始めて、エカセ絢爛の華彩を發すべし。彼の好句
天成といふもの、豈に、必ずしも、吐屬輒成章の謂ならむや。余
が山陽を惜む第四の理由とするは、すなはち、この經營刻畫
の魂氣のみ。

又、山陽が、當時の儒者の如くに、談義に耽り、章句訓詁の末
を争ふ風なかりしは、頗る、その才の發達に便なりしなるべ

しといへども、かの經濟實用を以て、學問の唯一本旨なりと考へしに至りては、山陽もまた、その常套を襲ふを免れざりしなり。山陽の才幹を窺ふに、政治吏務は、長ずるところにあらざりしが如し。早く、自ら、計をなし、區々たる論策を作るをやめ、大に、詩に奮はゞ、その成功、何ぞ、唯、今日の名聲に止らむ。人、或は謂はむ、山陽は、外史を著して、一世を鼓舞し、大に、尊正の氣象を喚起して、遂に、維新中興の遠因をなせり。もし、外史を作らず、一詩人にして、やまむか、いかで、この大功を奏するを得むと。嗚呼、これ、詩を知らざるもの、言のみ、詩の、人心を感發するは、その勢力、遙に、散文に過ぐ。外史果して、よく、維新中興の遠因をなせりといはゞ、外史中の事實を敷衍して、こ

れを、詩にせるもの、亦、豈に、その遠因となる能はざらむや。かつ、外史の如きは、その文章、いかに、靈妙なるも、今日の史學より、これを見れば、小説と實録との間によこたはる、一種の不可思議物たり。史の名目を以てしては、決して、完璧なりといふ能はず。上乘なりといふ能はず。さては、始より、純然たる詩篇のまされるに、まかざるなるなり。柴野博士は、山陽童時の詩を見て、大に、歎賞し、吾等、人物實材たらしむべし、詞人たらしむべからずとて、山陽の父春水に勧めて、史を學ばしめたりといへり。博士の見亦、時流を脱せずといへども、その史を學ばしめたるは、大に可なり、その、遂に、修史の業に志すに至らしめたるは、余が、山陽のために、再四、歎惜するところなり。(朝比奈知泉文稿)

四、叙事詩人としての巢林子

叙事詩人としての近松が特質いかにと見るに、泰西の叙事詩人にれいて、曾て、見ざる所の特質あまたあり。それは、近松の叙事詩の、たゞに、音樂にあはせて、謠はるゝものたるにとゞまらで、一種の演劇に應用せられたればなり。くはしくいへば、彼が作は、事體にれいては、叙事なれど、その用にれいては、脚本たり。彼は、聽かしむと同時に、見しめむと力めたり。彼は、常に、作と三絃との關係に注意し、又、常に、作と傀儡との關係に注意せり。かるが故に、正しく、彼を批判せむとする者は、ひとり、讀むべき文章としてのみ、彼が作を觀るべからず。

聽くべきものとしての價值ならびに見るべきものとしての効果をも、考へざるべからず。去かして、近松が、最も、心を潜めたるは、明に、後の二需要に應ずる秘訣なり。

彼は、この二需要に應ぜむがために、當時、存在したりし、あらゆる材料を蒐集し、巧に、これを混和したり。すなはち、聽覺を悦ばしめむがためには、當時の唯一の劇詩、謠曲、れよび、狂言の粹を抜き、或は、平家琵琶、或は、説經、祭文、俗歌、童謠、鄙曲、流行節、その他、あらゆる謠物の要素をば、自在に、これを拾收し來りて、その作中に利用せざるなし。さて、また、視覺を娛ませむがためには、既に、その頃、行はれたりし、幼稚なる、傀儡は、いふにれよばず、能狂言にれける扮装、科介、みやびたる舞踏、俗

散

狂言

間の踊の手あらゆる興行物ありとある展覽物の苟も人目を悦ばするに足るべきものは取りて、以て材料とし、これをその作に利用せざるなし。實に、目に訴ふると、耳に訴ふるとは、巢林子が常住の目的なりき。彼は、この二需要だに充すことを得ば、他の毀損することあらむも、介意せざりしなり。

彼、豈に、必ずしも、普通の語格文法を知らざりしものならむや。夫かも、節奏のためには、わざと、國文の格を破り、誦讀の便宜のためには、わざと、通俗の訛語をものし、また、衍字をもとるせり。今に傳れる刊行本に、甚しき衍字、あて字あるは、勿論、謄寫者の誤ならめど、幾分かは、作者の杜撰もまじりたるむか。例へば、「澁面」など記すべきを、「十面」と書し、「かくて」を「角て」

「伴ひ」を「友なひ」、「夫」を「妻」など、ものしたるは、作者のあづかり知らぬところなりとするも、他の幾多の衍は、或は、讀ましむるを主とせずして、朗誦せしむるを本意とせし、作者巢林子の機轉にあらずや。

また、彼は、常に、下等社會をもて、正當の觀客とせり。この故に、彼は、常に、通俗を本願とせり。これ、實に、近松を評するに、これ、評者の忘るべからざる要點なり。彼は、通俗の需要に應ぜむがために、屢、大なるものを犠牲にせり。明にいへば、詩としての彼が作の失病は、概して、この通俗主義より來れり。

彼は、無學文盲なる多數の俗衆を悦ばせむとせり。彼は、婦人小兒の耳目をも娛ませむとせり。かくて、この約束に従は

むとせば、義經も、頼朝も、鎌足も、時致も、祐經も、木花開耶姫も、
稻田姫も、靜御前も、巴女も、自然母の必要によりて、元祿期の華
奢なる流行衣裳を被りてあらはれ、多少當時の通語を使ひ、
時としては、全くの元祿人となり、全く、世話に_レく_レだけで、正當
の觀客たる下等社會の同感情を呼ばざるべからず。

彼等の説くところは、彼等が社會の智識以外に出づべか
らず。菅原道眞の博學なるも、悉陀太子の高尙なるも、俗衆の
智識以上にわたるべからず。蓋し、俗衆ウカの智識をいへば、支那
の事蹟は、三國史、漢楚軍談、武王軍談、二十四孝のたぐひの外
に出でずして、本朝の事蹟は、義經記、盛衰記、太平記等をきは
みとす。彼等は、智者といへば、正成、孔明、勇者といへば、朝比奈

辨慶、孝子といへば、曾我兄弟、忠臣といへば、豫讓の古事を知
るのみ。こゝに_レいて、作者も、人物も、常に、口をつかねざるべ
からず。故に、時代ちがひ、風俗、人情の相違、史的事實清一七の甚しき
誤謬、もしくは、神代の人物が、唐宋の古事を語り、保元平治の
武將が、元以後の事蹟を説くなどは、もとより、あやしむに足
らざるなり。

要するに、近松は、ひたすら、人情を寫さむとつとめて、個人
性を寫さむとつとめざりしなり。彼の作の、史劇として、見る
べからざるは、全く、これがためなり。されど、叙事詩の體とし
ては、かならずしも、とがむべきことにもあらざらむか。(坪内

雄藏著文學その折々)

幸田四郎
尾崎徳次郎
森田太郎
坪内逍遙

公卿殿上人四位上守
大、ウツル

十善
不殺生、不偷盜、不邪淫、
不妄語、不惡口、不西生、
不綺語、不憍貪、不瞋害、
不邪見

五、笠置山

さる程に、類火、東西より吹かれて、餘煙、皇居にかゝりければ、主上を始めまゐらせて、宮々、卿相、雲客、皆、歩跳なる體にて、いづくをさすともなく、足に任せて落ち行き給ふ。この人々、はじめ、一二町が程こそ、主上を扶けまゐらせて、前後に御供をも申されたりけれ。雨風烈しく、道闇くして、敵の鬨の聲、ここかしこに聞えければ、次第に、別々になりて、後には、たゞ、藤房、季房二人より外は、主上の御手をひきまゐらす人もなし。忝くも、十善の天子、玉體を田夫野人の形に替へさせ給ひて、そことも知らず、迷ひ出でさせ給ひける御有様こそ、あさ

夏目十、ウツル、見、
不殺生、
不妄語、
不綺語、
不憍貪、
不瞋害、
不邪見

多賀の郡は、
綴喜郡多賀
郷の誤。

ましけれ。いかにもして、夜の内に、赤坂の城へと、御心ばかりを盡されけれども、假にも、未だ、習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休み、二足には立ち止り、晝は、道の傍なる青塚の蔭に、御身を隠させ給ひて、寒草の疎なるを御座の茵とし、夜は、人も通はぬ野原の露、分け迷はせ給ひて、羅穀の御袖をほしあへず。とかうして、夜晝三日に、山城の多賀の郡なる有王山の麓まで、落ちさせ給ひけり。

藤房、季房も、三日まで、口中の食を断ちければ、足たゆみ、身疲れて、今は、いかなる目に逢ふとも、逃げぬべき心地せざりければ、せむ方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣、兄弟、諸共に、うつゝの夢に伏し給ふ。梢を拂ふ松の風を、雨の降るかと聞し

召して、木蔭に立ち寄せ給ひければ、下露のはらはらと、御袖にかゝりけるを、主上、御覽せられて、

さしてゆく、笠置の山を出でしより、

あめがしたには、かくれがもなし。

藤房卿、涙をれさへて、

いかにせむ、頼む蔭とて、たちよれば、

なほそでぬらす、まつのまたつゆ。

山城の國の住人、深須入道、松井藏人二人は、この邊の案内者なりければ、山々峯々、残る所なく、搜しける間、皇居、隠れなく、尋ねいだされさせ給ふ。主上、誠に、怖しげなる御氣色にて、「汝等、心ある者ならば、天恩を戴きて、私の榮花を期せよ」と、仰

ウツリヨシニカカレル所モナク。

せられければ、さしもの深須入道、俄に、心がはりして、あはれ、この君を隠し奉りて、義兵をあげばやと、思ひけれども、跡に續ける松井が所存、知り難かりける間、事の漏れ易くして、道の成り難からむことをはかりて、もだしける。こそうたてけれ。俄の事にて、綱代の輿だになかりければ、張輿のあやしげなるに、扶け乘せまゐらせて、まづ、南都の山へ入れ奉る。その體、たゞ、殷湯、夏臺に囚はれ、越王、會稽に降ぜし、昔の夢に異ならず。これを聞き、これを見る人ごとに、袖をぬらさずといふことなかりけり。(太平記)

六、砲のひびき

六月一日、雨。思ふ事ありて、俄に、國に歸り行かむとす。その事ども、薩摩人に謀りてのち、

何處とも、ところ定めぬ、我が身すら、

みよこばかりは、たちうかりけり。

二日、晴れわたれり。歸期延びぬ。れもふむねありて、

事にふれ、時につけつゝ、うつれるは、

こゝろのほかの、こゝろなりけり。

五日照りわたれり。過ぎし子とし、水無月の今日、わが友

なりける杉山律義、吉田年丸など、かたらひはかりて、國のた

めにと思ひれこしゝことありけるが、そのこと成らず、身ま

かりけり。今日、それが墓にまうでて、

さらばとて、別れし時の、ことのはも、

問はずがたりと、なりにけるかな。

十三日、なかば晴れたり。宵すぐる頃、うちかはりたるけし

きにて、月、いと、あかゝりければ、

五月雨に、とぎせる窓も、あけぬまに、

うれしく、つきの、かげこぼれきぬ。

十四日、晴れたり。

五月雨の、晴れゆく空も、あるものを、

はれぬはなにの、れもひなるらむ。

十五日、昨日にれなじ。西郷吉之助、來りて、時勢を劇談す。

あつしとは、れもひ定めし、空ながら、

くるしといはぬ、日はなかりけり。

十六日、今日もよし。薩摩公、手づから、六連砲を賜ひて^たければ、うれしさのあまり、

向ふ仇、あらばうてよと、たまはりし、

つゝのひゞきも、世にやならさむ。

十七日、なかばよし。夕つかたより、薩摩人、村田新八、黒田了介と共に、いよいよ、都をいでたちぬ。(山縣有朋著葉櫻日記抄録)

七、落花の雪

落花の雪に、ふみまよふ、かた野の春の、櫻がり、紅葉の錦、着て歸る、嵐の山の、秋の暮、一夜をあかす、ほどだにも、旅ねとな

れば、物うきに、恩愛のちぎり、淺からぬ、わがふるさとの、妻子をば、ゆくへも知らず、おもひれき、年久しくも、住み馴れし、九重の帝都をば、今をかぎりとかへりみて、思はぬ旅に、いでたまふ、心のうちぞ、あはれなる。うきをばとめぬ、あふ坂の、關の志みづに、袖ぬれて、未は山路を、うちでの濱、沖を遙に、見わたせば、潮ならぬ海に、こがれ行く、身をうき舟の、うき志づみ、駒もとゞると、踏み鳴らす、勢多の長はし、うち渡り、行きかふ人、にあふみ路や、世をうねの野に、なきたづも、子を思ふかと、あはれなり。時雨もいたく、もる山の、木の下露に、袖ぬれて、風に露ちる、篠原や、笹わくる道を、すぎゆけば、鏡の山は、ありとも、涙にくもりて、見えわかず、物を思へば、夜⁴⁸のまにも、れいそ

の森の下草に、駒を留めて、かへりみる、故郷を雲や、隔つらむ。番場、醒が井、柏原、不破の關屋は、荒れはて、なほもる物は、秋の月、いつかわが身の、をはりなる、熱田の八つるぎ、伏し拜み、志ほひに今や、なるみがた、傾く月に、道みえて、明けぬ暮れぬと、行く道の、末はいづくと、とほたふみ、濱名の橋の、夕潮に、ひく人もなき、捨小舟、沈みはてぬる、身にしあれば、誰かあはれと、ゆふ暮の、入相なれば、今はとて、池田の宿に、つきたまふ。

元暦元年の頃か、とよ、重衡の中將の、東夷のために、とらはれて、この宿につき給ひしに、「東路の、はにふの小屋の、いぶせきに、ふるさといかに、こひしかるらむ」と、長者の娘が、よみたりし、そのいにしへの、あはれまでも、思ひ残さぬ涙なり。旅館

の燈、かすかにして、雞鳴、曉を催せば、匹馬、風にいばえて、天龍川をうち渡り、さやの中山、越え行けば、白雲道を、うづみ來て、そこともまらぬ、夕暮に、家郷の天を、望みても、昔、西行法師が、「命なりけり」と、詠じつゝ、二たび越えし、跡までも、うらやましくぞ、思はれける。隙ゆく駒の、足早み、日、すでに、亭午に上れば、かれいひ、進むるほどとて、輿を前庭にかき止む。ながえをたき、たきて、警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり」と、答へければ、承久の合戦の時、院宣かきたりし咎によりて、光親卿、關東へ召し下されしが、この宿にて、誅せられし時、「昔、南陽縣、菊水、汲、下流、而延齡、今、東海道、菊川、宿、西岸、而終命」と、かきたりし、遠き昔の筆の跡、いまは、わが身の、上になり、

あはれやいとゞまさりけむ、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ、
かゝれける。

古も、かゝるためしを、きく川の、

れなじ流に、身をやまづめむ。

大井川をすぎ給へば、都にありし名をきゝて、龜山殿の行
幸の、嵐の山の花盛、龍頭鷁首の舟に乗り、詩歌管絃の宴に侍
りしことも、今は、二たび見ぬ夢となりぬと、思ひつゞけ給ふ。
島田、藤枝にかゝりて、岡への眞葛、うら枯れて、ものゝ悲しき
夕暮に、宇都の山べを、越え行けば、蔦楓いと茂りて、道もなし。
昔業平中將の、すみかを求むとて、東の方へ下りしに、夢にも
人に、あはぬなりけりと、よみたりしも、かくやと、思ひやられ

たり。清見がたを過ぎ給へば、都にかへる、夢をさへ、通さぬ波
の、關守に、いとゞ涙を、催され、むかひはいづこ、みほが崎、興津、
蒲原、うちすぎて、ふじの高根を、見給へば、雪の中より、たつ煙、
上なき思に、くらべつゝ、明くる霞に、松見えて、浮島が原を、過
ぎ行けば、志ほひや淺き、舟みえて、れりたつ田子の、みづから
も、うき世をめぐる、車がへし、竹の下道、ゆきなやむ、足柄山の、
たうげより、大磯、小磯、見れるして、袖にも波は、こゆるぎの、い
そぐとしもは、なけれども、日數積れば、七月廿六日の暮程に、
鎌倉にこそ、つき給ひけれ。(太平記)

八、東關紀行の一節

海親行の京都より足柄山を過る

東山の邊なる住家を出でて、相坂の關、うち過ぐるほどに、
 駒引きわたる望月の頃も、やゝ近き空なれば、秋霧立ちわた
 りて、ふかき夜の月影、ほのかなり。木綿附鳥、かすかに音づれ
 て、遊子（月夜、鳥の聲、朝、夕、夜、月、影、ほのかなり、木綿附鳥、かすかに音づれ、遊子、なほ、残月、に行きけむ、幽谷の、有様、思ひいでらる、むか
 し、蟬丸といひける世捨人、この關の邊に、わらやの床を結び
 て、常は、琵琶をひきて、心をすまし、大和歌を詠じて、れもひを
 述べけり。ある人のいはく、蟬丸は、延喜第四の宮にて、れはし
 けるゆゑに、この關のあたりを、四の宮、河原と名付けたりと、
 いへり。

いにしへの、藁屋の床の、あたりまで、
 こゝろをとむる、あふさかのせき。

關山を過ぎぬれば、打出の濱、粟津の原など、きけども、いま
 だ、夜のうちなれば、さだかにも、見わかず。昔、天智天皇の御代
 大和國飛鳥の岡本の宮より、近江の志賀の郡に、都うつりあ
 りて、大津の宮を造られけりと、きくにも、この程は、ふるき皇
 居の跡ぞかしと、れほえて、あはれなり。

さゝなみや、大津の宮の、あれしより、
 名のみの、これる、志がの、ふるさと。

曙の空になりて、瀬多の長橋、うち渡すほどに、湖は、るかに、
 あらはれて、かの満誓沙彌が、比叡山にて、この海を望みつゝ、
 よめりけむ歌、れもひ出でられて、漕ぎ行く舟の、あとの、志ら
 波、まことに、はかなく、心ほそし。

世の中を、漕ぎ行く舟に、よそへつゝ、

ながめしあとを、またぞながむる。

このほどをも行き過ぎて、野路といふ處にいたりぬ。草の原、露、まげくして、旅衣、いつしか、袖のまづく、ところせし。

あづまぢの、野ぢの朝露、けふやさは、

たもとにかゝる、はじめなるらむ。

篠原といふ處をみれば、西東へ、はるかに、長き堤あり。北には、里人、住家をまぬ、南には、池のれもて、遠く、見えわたる。むかひの汀、みどり深き松のむら立、波の色も、ひとつになり、南山の影をひたさねども、青くして、洗滌たり。洲崎、處々に入りちがひて、あし、かつみなど、生ひ渡れる中に、をしかもの、うち群

れて、飛びちがふさま、葦手をかけるやうなり。都をたつ旅人、この宿にこそとまりけるが、今は、うち過ぐる類のみ多くして、家居も、まばらになり行くなど聞けば、かはり行く世のならひ、飛鳥の河の淵瀬には、限らざりけりと、れほゆ。

ゆく人も、とまらぬ里となりしより、

あれのみまさる、野路のまのはら。

鏡の宿に至りぬれば、むかし、な々の翁の、よりあひつゝ、老を厭ひて、よみける歌の中に、「鏡山、いざたちよりて、見てゆかむ。年へぬる身は、老やまぬると」と、いへるは、この山の事にやとれほえて、宿も、からまほしく覺えたれども、なほ、れくさまに、とふべきところありて、うち過ぎぬ。

たち寄らで、けふは過ぎなむ。鏡山

志らぬれきなの、かげはみずとも、

行き暮れぬれば、むさ寺といふ、山寺のあたりに宿りぬ。まばらなるとこの秋風、夜ふくるまゝに、身に志みて、都には、いつしか引きかへたる心地す。枕に近き鐘の聲、曉の空にれとづれて、かの遺愛寺の邊の草の庵の寐ざめも、かくやありけむと、哀なり。行末遠き旅の空、思ひつゞけられて、いと、いたう、ものがなし。

都出でて、幾日もあらぬ、今宵だに、

かたしきわびぬ、とこのあきかぜ。

(東關紀行)

九、城墟感懷

一とせ、筑波山にもものしつるついでに、このわたりは、昔、芳野の宮の御時、御軍の戦ひつる處と聞けば、たゞにやはとて、こかひといふ川を渡りて、やゝ、高き處に登れば、木深き森の中に、八幡の神の御社、いと、かうがうしくて、立たせ給へり。廣前に、ぬかつきはてゝ、そこはかとなく、見巡るに、うしろは、いと、廣き湖にて、はるばると、見わたされぬ。前は、田畑、すこしひきくて、たゞならぬ處のさまなり。そこらたちめぐるほどに、祝部、いできたり。昔、源准後のれはしつる、大寶の城のあととは、と、問へば、即ち、このあたりよ。こなたは、追手、かなたは、搦手なり。その世のさまは、たゞ、思ひやるのみにて、つばらなること

は、知らねど、今も、田畑より、矢のまり、太刀の折れたるなど、をりをり、堀り出づることあり。この湖の西さま一里ばかり隔てたる處に、關の城のあとも残れり。その西二里ばかりありて、伊佐といふ里もあり。筑波山の東につゞきて、小田の城といへりし處も、遠からずなど、れよびを指しつゝいふ。

當時、楠木、新田の朝臣など、つぎつぎに、亡びて、御軍の、やゝ衰ふるきは、に、准后の、大宮人に、れはしましなから、東の皇軍の事をうけたまはりて、常陸の國內に、六所の城を構へて、三年のほど、世の中をとゝのへ給へるは、いみじき功績なりけり。志かのみならず、かゝる中に、れはしながら、職原抄、神皇正統記などいふ書を、かゝせ給ひて、大みかどに奉り、はた、御軍

人等に示し給ひけむいと、たふとしや。昔より、あづまをのこは、天の下にならびなき、みかどのまもりとて、たけきためしにいふなるを、この國人を、れきて、肥後の菊池等の外には、まめやかに、仕へまつりにしは、きこえず。

かゝれば、御軍のいきほひ、やゝやゝに、衰へゆきて、終には、弓折れ、矢盡き、この城ども、保ち難ければ、准后も、志のびて、芳野の大みかどに、歸らせ給ひにけむいと、くち惜しく、いきどほろしきわざなりけり。あはれ、かゝる世には、大君に仕へまつらむとすれば、命たへず、親をも、子をも、はぐくまむとするに、寶なし。國もやぶれ、家も亡びて、その名のみこそきこゆれ、なにか、世には、残らむ。あはれに、かなしきわざな

らずや。今のめでたき御代に生れあひて、れもひのまゝに、田
舎わたらひまつゝ、かゝるあとを見るにつけて、そのかみに
生れ出でなばと、れもふにも、うれしき御世のめぐみならず
や。久米幹文著水屋集

一〇、芳野の行宮 その一

尊氏等、西國の凶徒を相語らひて、かさねて、攻めのほりぬ。
官軍、利なくして、都に歸參せし程に、同廿七日に、又、山門に臨
幸し給ひけり。八月にいたるまで、たびたび、合戦ありしかど、
官軍、いと進まざりき。依りて、都には、元弘の時の主上（光嚴）の御
弟に、三の御子、豊仁と申しけるを、位につけ奉りぬ。十月十日

の頃にや、主上、山門より還幸。いとあさましかりし事どもな
れど、なほ、行末をねほしめす道ありしにこそ。東宮は、北國に
行啓あり。左衛門督實世卿以下の人々、左中將義貞朝臣をは
じめて、さるべき兵も、あまた、仕うまつりけり。主上は、尊號の
儀にてましましき。御心をやすめ奉らむためにや、成長親王
を、東宮に、すゑ奉りぬ。

同十二月に、忍びて、都を出てましまして、河内の國に、正成
といひしが、一族を召し具して、芳野に入らせ給ひぬ。行宮を
つくりて、渡らせ給ひ、もとのごとく、在位の儀にてぞましま
しける。内侍所も、うつらせ給ひ、神璽も、御身に隨へ給ひけり。
誠に、奇特の事にこそありしか。芳野の御幸に、さきだちて、義

兵をれこす輩もありき。臨幸の後には、國々にも、御志あるたぐひ、あまた、聞えしかど、次の年も、くれぬ。

又シタノ三年の年、戊寅ツタニの春二月、鎮守大將軍顯家卿、また、親王親王を先だて申し、かさねて、打ち上りぬ。海道の國々を、悉く平げて、伊勢、伊賀を経て、大和に入り、奈良の京になむ着きにける。それより、處々の合戦、あまた度、互に、勝負ありしに、同五月、和泉の國石津といふ處にての戦に、時やいたらざりけむ、忠孝の道、ここに、てきはまりにき。苔の下にもうづもれぬ物とは、唯、徒に、名をのみぞとゞめし。心うき世にもありしかな。官軍、なほ、心を勵して、男山に陣をとりて、まばらく、合戦ありしかど、朝敵、まのびて、社壇を焼き拂ひしより、事成らずして、引き退き

ぬ。北國にありし義貞も、たびたび、召されしかど、上りあへず、させることなく、空しくさへなりぬと聞えしかば、いふばかりなし。

一一、芳野の行宮その二

さてしもやむべきならずとて、陸奥の御子、また、東へ向はしめ給ふべき定あり。左少將顯信朝臣、中將に轉じ、從三位に叙せられ、陸奥の介、鎮守將軍を兼ねしめて、遣されぬ。東國の官軍、悉く、かの節度に従ふべきよしを、れほせられぬ。親王は、儲君に立たせ給ふべき旨、申しきかせ給ひて、道の程も、かたじけなかるべし。國にては、あらはさせ給へとなむ申されし。

異母の御兄も、數多ましましき。同母の御兄も、前東宮恒良親王、成良親王ましまし、かく、定り給ひぬるも、天命なれば、かたじけなし。七月の末つ方、伊勢に越えさせ給ひて、神宮に事のよしを啓して、御船のよそひし、九月のはじめ、纜を解かれしに、十日あまりの事にや、上總の地近くより、空の景色、れどろれどろしく、海上、荒くなりしかば、又、伊豆の崎といふ方に、漂はれしに、いとゞ、波風れびたゞしくなりて、あまたの船行き方知らずなりけるに、御子の御船は、さはりなく、伊勢の海につかせ給ひぬ。顯信朝臣は、もとより、御船にさぶらひけり。同じ風のまぎれに、東をさして、常陸の國なる内の海に來つきたる船ありき。方々に、たゞよひし中に、この二つの船、同

じ風にて、東西に吹き分けられぬ。末の世には、めづらかなるためしにぞあるべき。儲君に定らせたまひて、例なき鄙の御住居も、いかゞと覺えしに、皇大神の、とゞめ申させ給ひけるなるべし。後に、芳野へ入らせましまして、御目の前にて、天位をつがせ給ひしかば、いとゞ、思ひあはせられて、尊くもありしかな。又、常陸は、もとより、心ざす方なれば、御志ある輩、相はからひて、義兵、こはくなりぬ。奥州、野州の守も、次の年の春、重ねて、下向して、れのれの國につきにき。

さても、舊都には、戊寅の年の冬、改元して、曆應とぞいひける。芳野の宮には、もとの延元の號なれば、國々も、思ひ思ひの年號なりき。もろこしには、かゝるためし多けれど、この國に

は、例なし。されど、四とせにもなりぬるにや。大日本島根は、もとよりの皇都なり。内侍所、神璽も、芳野にればしませば、いづくか、都にあらざるべき。さても、八月の十日あまり六日にや、秋霧にをかされさせ給ひて、かくれましましぬとぞ聞えし。寝るが中なる夢の世、今にはじめぬならひとは知りながら、かずかず、目の前なるこゝちして、老の涙もかきあへねば、筆の跡さへ、とほりぬ。昔、仲尼は、獲麟に筆を絶つとあれば、こゝにて、止りたくはあれど、神皇正統の、よこしまなるまじきことわりを申しのべて、素意の末も、あらはさまほしくて、去ひて、記しつくるなり。かねて、時をもさとしめ給ひけるにや、前の夜より、親王をば、左大臣の第へうつし奉られて、

三種の神器を傳へ申されぬ。後の號をば、仰のまゝにて、後醍醐の天皇と申す。神皇正統記 並島親房 雁中より書きし事也 其時代より、後世天皇の御事、事記載せし也

一一、吉水院

吉水院は、ところばなれたる一つの岡にて、道より左へ、いさゝか下りて、又、すこし上るところなり。めぐりは、谷なり。後醍醐の帝の、去ばしが程、おはしまし、處とて、ありしまゝに残れるを、入りて見れば、げに、物ふりたる殿の内、のたゝずまひ、世の常のところとは見え、掛けまくは、かしこけれど、いにしへの、心を汲みて、よし水の、ふかきあはれに、袖はぬれけり。

彼の帝の御像、後村上の帝の御みづから、刻み奉り給へるとして、それはしますを、拜み奉るにも、

あはれ君、この吉水に、うつり來て、

のこる御影を、見るもかしこし。

また、そのかみの古き御寶物ども、あまたありて、見けれども、委しくは、えしも覺えず。

この寺の内に、さゝやかなる屋の、前うちはれて、見わたしの景色、いと、好きがあるに、たち入りて、見いだせば、子守の御社の山、むかひたかく見やられて、その山にも、かたへの谷などにも、ひまなく見ゆる櫻どもの、今は、青葉がちなるぞくちをしき。さはいへど、奥なる花は、さかりと見ゆるも、なほ、あまたにて、

みよしの、花は日數も、限なし。

青葉のれくも、なほさかりにて、

瀧櫻といふも、かしこにありと教ふ。

咲き匂ふ花のよそめは、たちよりて、

見るにもまさる、瀧のまらいと。

暮るゝまで、見るとも、厭く事あるまじうこそ。また、雲井櫻といふあり。後醍醐のみかどの、この花を御覽じて、「こゝにても、雲の櫻、咲きにけり。たゞかりそめの宿とれもふに」と、よませ給ひしも、

世々を経て、向むかひの山の、花の名に、

残るくもゐるの、あとはふりにき。

(本居宣長著菅笠日記)

三節、後醍醐天皇

一三、建武中興論

世に、後醍醐天皇の中興の大業、なかばごろにして、廢れにたることを、くちをしきことに思ひて、朝廷の賞罰、正しからざりし故なりなど、論ふものあり。こは、たゞ、成敗の事の迹をもて、推し測れるにて、そのかみの、ありしさまを、深くも、考へざるものなりけり。いでや、その世の、人情風氣の、いたく、なり沈みたるさまの、一二を、舉げて、書讀む人だちを、うちれどるかさむ。

天皇の、隱岐の國に、いでましける時、隱岐の判官は、鎌倉の

下知をうけて、三千の兵もて、守りたてまつりけるに、兒島の三郎が、天莫空勾踐時、非無范蠡」と、ものせるを見て、判官をはじめ、數多の兵ども、その心をさとするものだに、なかりしかば、天皇、ひとり、御心にうなづき給ひき」と、太平記に見えたり。いかに、猪武者なりとはいへ、こればかりのことを、えさとらぬなど、その時の人々の、ものまなびに、暗くして、物の理を辨へつべくも、あらざりしさま、思ひはかるべし。されば、建久このかた、武家の世となりしより、れしなべて、士といはるゝほどのものは、ひたすらに、弓矢もて、れのが莊園をば取られじ、人の鬪所をば押領せばやとのみ、心がけたるは、さながら、夜見の國に、醜女どもの集ひ荒ぶるに、ことならずなむ。葎生ひ茂

り、道もわかずなりぬるを、正しきすぢに引きかへして、二た
び、大御稜威を輝し給はむこと、かたしとも、かたき御わざな
らずや。時、いまだ、いたらずして、再び、世の中の亂れにたるは、
あながちに、この君の御はからひのあやまちにはあらじ。い
づれの國、いづれの世も、れしなべて、あしきさまより、よきに
うつりかはるきは、は、教といふものさきだちて、人々の心
を導き、まづ、その根本を養ひなすなり。然るを、この教といふ
もの、よ、志るべなかりせば、いかに、すぐれたる君、かしこき大
臣の、世に出て給ひて、大御はからひなし給ふとも、れほつか
なくやあらむ。

鎌倉このかた、世に、正道の道志るべするものなく、大義名

分は、夢にだに、知らぬ人々のみなり。承久の亂のをり、二位の
尼の、さかしらに、たくみたることばに、鎌倉十萬の武士たち
は、涙にひぢて、かどてせりといへり。太平記、光嚴院重祚の段
に、そのころ、物もれほえぬ田舎のものども、そゝるなる物語
志けるにも、あはれ、この、持明院殿ほど、大果報の人、は、れはせ
ざりけり、軍の一度をも志給はずして、將軍より、王位をたま
はらせ給ひたりと、申し沙汰しけると、見えたるは、いかに、あ
さましき世のありさまならずや。これぞ、教なき世の極なる
べき。かゝる世を志ろしめし給ひて、俄に、大御稜威をふり起
さむと志給ひしは、いとも、かしこきれほみわざにこそ。

尊氏に、御諱の一字を賜ひ、三位にさへ進め給ひしは、武士

どもの心を慰め給ひて、徐に、れきてさせ給はむとの、みはか
 らひとぞ覺ゆる。ざるを、こは、その時のやむことを得させ給
 はざりしなるべしなど、いひなせるは、その時のまことの有
 様をえ知らぬふみのかきさまとこそいふべけれ。神皇正統
 記に、建武のあやまちを論へるに、尊氏をはじめ、武士どもを、
 清華門院の上に加へられしをば、ひがごとにいひなせるは、
 この卿の職原鈔を書き給へる心ばへと同じく、有職家の一
 家言にして、中々に、公論とはいひがたかるべきか。井上毅文稿

一四、勅諭

我國の軍隊は、世々、天皇の統率し給ふ所にぞある。昔、
 神武天皇、躬づから、大伴、物部の兵どもを率ゐ、中國のま
 つろはぬものどもを、討ち平げ給ひ、高御座に即かせら
 れて、天下、恙ろしめし給ひしより、二千五百有餘年を経
 ぬ。此間、世の様の移り換るに隨ひて、兵制の沿革も、亦、屢
 なりき。

古は、天皇、躬づから、軍隊を率ゐ給ふ御制にて、時あり
 ては、皇后、皇太子の、代らせ給ふことも、ありつれど、大凡、
 兵權を、臣下に委ね給ふことは、なかりき。中世に至りて、
 文武の制度、皆、唐國風に、倣はせ給ひ、六衛府を置き、左右
 馬寮を建て、防人など設けられしかば、兵制は、整ひたれ

世衛
 近衛
 衛門
 左右

攝政

攝政
 攝政
 攝政

ども、打續ける昇平太平に狃れて、朝廷の政務も、漸、文弱に流
れければ、兵、農、本平れのづから、二に分れ、古の徵兵は、いつと
なく、壯兵の姿に變り、遂に、武士となり、兵馬の權は、一向
に、其武士どもの棟梁たる者に歸し、世の亂と共に、政治
の大權も、亦、其手に落ち、凡七百年の間、武家の政治とは
なりぬ。

世の様の移り換りて、斯なれるは、人力もて、挽回すべ
きにあらずとは、いひながら、且は、我國體に戻り、且は、我
祖宗の御制に背き奉り、淺間しき次第なりき。降りて、弘
化嘉永の頃より、徳川の幕府、其政衰へ、剩へ、外國の事ど
も起りて、其侮をも受けぬべき勢に迫りければ、朕が皇

祖仁孝天皇、皇考孝明天皇、いたく、宸襟を惱し給ひしこ
そ、忝くも、又、惶けれ。

然るに、朕、幼くして、天津日嗣を受けし初、征夷大將軍
其政權を返上し、大名、小名、其、版籍を奉還し、年を経ずし
て、海内一統の世となり、古の制度に復しぬ。是、文武の忠
臣、良弼ありて、朕を輔翼せる功績なり。歷世祖宗の、專、蒼
生を憐み給ひし御遺澤なりといへども、併、我臣民の、其
心に、順逆の理を辨へ、大義の重きを知れるが故にこそ
あれ。

されば、此時に於て、兵制を更め、我國の光を輝さむと
思ひ、此十五年が程に、陸海軍の制をば、今の様に建て定

めぬ。夫、兵馬の大權は、朕が統ぶる所なれば、其司々をこそ、臣下には任すなれ、其大綱は、朕躬づから、之を攬り、肯て、臣下に委ぬべきものにあらず。子々孫々に至るまで、篤く、斯旨を傳へ、天子は、文武の大權を掌握するの義を存して、再、中世以降の如き、失體なからむことを望むなり。朕は、汝等軍人の大元帥なるぞ。されば、朕は、汝等を股肱と頼み、汝等は、朕を頭首と仰ぎてぞ、其親は、特に、深かるべき。

朕が國家を保護して、上天の惠に應じ、祖宗の恩に報いまるらする事を、得るも、得ざるも、汝等軍人が、其職を盡すと、盡さざるとに由るぞかし。我國の稜威、振はざる

ことあらば、汝等、能く、朕と、其憂を共にせよ。我武、維揚りて、其榮を輝さば、朕、汝等と、其譽を偕にすべし。汝等、皆、其職を守り、朕と一心になりて、力を、國家の保護に盡さば、我國の蒼生は、永く、太平の福を受け、我國の威烈は、大に、世界の光華ともなりぬべし。朕、斯も、深く、汝等軍人に望むなれば、猶、訓諭すべき事こそあれ。いでや、之を、左に述べむ。

一、軍人は、忠節を盡すを、本分とすべし。

凡、生を、我國に稟くるもの、誰かは、國に報ゆるの心なかるべき。まして、軍人たらむ者は、此心の固からずは、物の用に立ち得べしとも思はれず。軍人にして、報國

の心、堅固ならざれば、如何程、技藝に熟し、學術に長ずるも、猶、偶人に等しかるべし。其隊伍も整ひ、節制も正しくとも、忠節を存ぜざる軍隊は、事に臨みて、烏合の衆に同じかるべし。抑、國家を保護し、國權を維持するは、兵力にあれば、兵力の消長は、是、國運の盛衰なることを辨へ、世論に惑はず、政治に拘らず、只々、一途に、己が本分の忠節を守り、義は、山嶽よりも重く、死は、鴻毛よりも輕しと覺悟せよ。其操を破りて、不覺を取り、汚名を受くるなかれ。

一、軍人は、禮儀を正しくすべし。

凡、軍人には、上、元帥より、下、一卒に至るまで、其間に、官

職の階級ありて、統屬するのみならず、同列、同級とて、も、停年に新舊あれば、新任の者は、舊任の者に服従すべき者ぞ。下級のものは、上官の命を承ること、實は、直に、朕が命を承る義なりと心得よ。己が隸屬する所にあらずとも、上級の者は、勿論、停年の、己より舊き者に對しては、總て、敬禮を盡すべし。又、上級の者は、下級の者に向ひ、聊も、輕侮、驕傲の振舞あるべからず。公務の爲に、威權を主とする時は、格別なれども、其外は、務めて、懇に、取り扱ひ、慈愛を專一と心掛け、上下一致して、王事に勤勞せよ。若、軍人たる者にして、禮義を紊り、上を敬はず、下を惠まずして、一致の和諧を失ひたらむ

には、啻に、軍隊の蠹毒たるのみかは、國家の爲にも、ゆるし難き罪人なるべし。

三、軍人は、武勇を尙ぶべし。

夫、武勇は、我國にては、古より、最も、貴べる所なれば、我國の臣民たらむもの、武勇なくては、叶ふまじ。況して、軍人は、戰に臨み、敵に當るの職なれば、片時も、武勇を忘れてよかるべきか。さはあれ、武勇には、大勇あり、小勇ありて、同じからず。血氣には、やり、粗暴の振舞など、せむは、武勇とは、謂ひ難し。軍人たらむ者は、常に、能く、義理を辨へ、能く、膽力を練り、思慮を彈して、事を謀るべし。小敵たりとも、侮らず、大敵たりとも、懼れず、己が

武職を盡さむこそ、誠の大勇にはあれ。されば、武勇を尙ぶものは、常々、人に接するには、溫和を第一とし、諸人の愛敬を得むと、心掛けよ。由なき勇を好み、猛威を振ひたらば、果は、世人も忌み嫌ひて、豺狼などの如く思ひなむ。心すべきことにこそ。

四、軍人は、信義を重ずべし。

凡、信義を守ること、常の道には、あれど、わきて、軍人は、信義なくては、一日も、隊伍の中に交りて、あらむこと、難かるべし。信とは、己が言を踐み行ひ、義とは、己が分を盡すを謂ふなり。されば、信義を盡さむと思は、始より、その事の成し得べきか、得べからざるかを、審に、

思考すべし。臆氣なる事を假初に諾ひて、よしなき關係を結び、後に至りて、信義を立てむとすれば、進退、谷りて、身の措き所に苦むことあり。悔ゆとも、その詮なし。始に、能く、能く、事の順逆を辨へ、理非を考へ、その言は、所詮、踐むべからずと知り、その義は、とても、守るべからずと悟りなば、速に、止るこそよけれ。古より、或は、小節の信義を立てむとて、大綱の順逆を誤り、或は、公道の理非に踏み迷ひて、私情の信義を守り、可憐あたらし、英雄、豪傑どもが、禍に遭ひ、身を滅し、屍の上の汚名を、後世まで遺せること、其例、尠からぬものを、深く、警めてやはあるべき。

一、軍人は、質素を旨とすべし。

凡、質素を旨とせざれば、文弱に流れ、輕薄に趨り、驕奢、華靡の風を好み、遂には、貪汚に陥りて、志も、無下に、賤しくなり、節操も、武勇も、其甲斐なく、世人には、瓜はじきせらるゝまでに至りぬべし。其身、生涯の不幸なりといふも、中々、愚なり。此風、一たび、軍人の間に起りては、彼の傳染病の如く、蔓延し、士風も、士氣も、頓に、衰へぬべきこと、明なり。朕、深く、之を懼れて、曩に、免黜條例を施行し、略、此事を誠め置きつれど、猶も、其惡習の出でむことを憂ひて、心安からねば、故に、又、之を訓ふるぞかし。汝等軍人、ゆめ、此訓誡を等閑にな思ひそ。

右の五箇條は、軍人たらむもの、暫も忽にすべからず。さて、之を行はむには、一の誠心こそ大切なれ。抑、此五箇條は、我軍人の精神にして、一の誠心は、又、五箇條の精神なり。心、誠ならざれば、如何なる嘉言も、善行も、皆、うはべの裝飾にて、何の用にかは立つべき。心だに誠あれば、何事も成るものぞかし。況してや、此五箇條は、天地の公道、人倫の常經なり。行ひ易く、守り易し。汝等軍人、能く、朕が訓に遵ひて、此道を守り行ひ、國に報ゆるの務を盡さば、日本國の蒼生、舉りて、之を悦びなむ。朕、一人の憚のみならむや。明治十五年一月四日。

一五、如意輪堂

南朝 足利尊氏
北朝 北條親房

安部野の合戦は、霜月廿六日の事なれば、渡邊の橋よりせきれとされて、流るゝ兵五百餘人、かひなき命を、楠木に助けられて、川より引き上げられたれども、秋の霜、肉を破り、曉の氷、膚に結んで、生くべしとも見えざりけるを、楠木、情ある者なりければ、小袖を脱ぎかへさせて、身を暖め、藥を與へて、疵を療せしむ。かくの如く、四五日、皆、いたはりて、馬に乗る者は、馬を引き、ものゝ具失へる人には、物の具を着せて、色代してぞ送りける。されば、敵ながら、その情を感ずる人は、今日より後、心を通ぜむ事を思ひ、その恩を報ぜむとする人は、頓て、

彼の手に屬して、後、四條繩手の合戦に、討死をぞ志ける。

さても、今年、兩度の合戦に、京勢むげに、打ち負けて、畿内、多く、敵の爲に侵し奪はる。遠國、また、蜂起しぬと告げければ、將軍左兵衛督の周章、只、熱湯にて、手を洗ふが如し。今は、未々の源氏、國々の催勢などを向けては、叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を、兩大將にて、四國、中國、東山、東海、廿餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢、雲霞の如く、淀、八幡に、着きぬときこえしかば、楠木帶刀正行、舍弟正時、一族、うち連れて、十二月廿七日、吉野の皇居に、手參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成、弱疋弱の身を以て、大敵の威を碎き、先朝の宸襟を安め、参らせ候ひし後、

天下、程なく亂れて、逆臣、四國より攻め上り候ふ間、危きを見て、命を致す所、かねて、思ひ定め候ひけるによつて、遂に、攝州湊川にして、討死仕り候ひ畢んぬ。その時、正行十一歳に罷り成り候ひしを、合戦の場へは伴はれて、河内へ歸し、死に残り候はんずる一族を扶持し、朝敵をほろぼし、君を御代に即け参らせよと、申し置きて、死にて候ふ。然るに、正行、正時、己に、壯年に及び候ひぬ。この度、われと手を碎き、合戦仕り候はずば、かつは、亡父の申し、遺言に違ひ、かつは、武畧のいひがひなき、誇謗に落つべく覺え候ふ。有待の身、思ふに任せぬならひにて、病に犯され、早世仕る事候ひなば、只、君の御爲には、不忠の臣となり、父の爲には、不孝の子となるべきにて候ふ間、今度、

師直、師泰に駈け合はせ、身命をつくし、合戦仕つて、彼等が頭を、正行が手に懸けて取り候ふか。正行、正時が首を、彼等に取られ候ふか。その二つの中に、戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて、今一度、君の龍顔を拜し奉らむために、参内仕つて候ふと、申しもあへず、涙を、鎧の袖にかけて、義心、その氣色に顯れければ、傳奏、いまだ、奏せざる前に、まづ、直衣の袖をぞぬらしける。

主上、則ち、南殿の御簾を、高く、捲かせて、龍顔、ことに、麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召し、以前、兩度の戦に勝つことを得て、敵軍を屈せしむ。叡慮、まづ、憤を慰する。條、累代の武功、かへすがへすも、神妙なり。大敵、今、勢をつくして向ふなれ

ば、今度の合戦、天下の安否たるべし。進退、度に當り、變化、機に應ずる事は、勇士の心とする所なれば、今度の合戦、手を下すべきにはあらずと雖も、進むべきを知つて、進むは、時を失はざらむが爲なり。退くべきを見て、退くは、後を全うせむが爲なり。朕、汝を以て、股肱とす。慎んで、命を全うすべしと、仰せ出されければ、正行、頭を地につけて、とかくの勅答に及ばず、只、これを、最後の参内なりと、思ひ定めて、退出す。

正行、正時、和田新發意、舍弟、新兵衛、同紀六左衛門、子息二人、野田四郎、子息二人、楠木、將監、西河、子息、關地、良圓以下、今度の軍に、一足も引かず、一所にて討死せむと、約束したりける兵、百四十三人、先皇の御廟に参つて、今度の軍、難儀ならば、討死

手紙に「返すは、君に返すべし、
かたじけなく、返すは、君に返すべし、
返すは、君に返すべし、

仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各、名字を過去帳に
書き連ねて、その奥に、

返らじと、かねて思へば、梓弓、

なき數に、いる、名をぞとゞむる。

と、一首の歌を書き留め、各、鬢髪を切つて、佛殿に投げ入れ、そ
の日、吉野をうち出でて、敵陣へぞ向ひける。(太平記)

一六、小楠公(本居豊頼詠)

北風つよく、ふきあれて、

ますます寒き、よし野山、

のこる一木も、今はとて、

散りしかあはれ、若ざくら。

一七、熊王發心

大夫判官赤松光範が、津の國のかためなりける時、左馬頭
正儀に、度々、はかられけるを、口をしく思ひこめて、過し侍り
けるに、去ぬる住吉の戦に討たれて失せし、宇野の六郎とい
ひしが子に、熊王といひけるが、まだ、をさなき時、光範にいひ
けるは、正儀は、わがためにも、親の敵にてさぶらへば、いかに
もして、撃ち侍らむ。河内へ越えて、正儀に仕へ侍らむに、をさ
なく候へば、などか、心をゆるし申さぬことのなかるべき。た
とひ、心をゆるすことの侍らずとも、七とせ八とせ程も、仕へ

候はゞ、そのうちには、撃ちぬべきたよりの、いかで、なからむ。御暇をこそ賜はらめ」と、涙をながせば、光範も、いとあはれと思ひながら、をさなければ、敵の國へやらむも、こゝろもとなし、又は、命にかはりて、うたれしものゝ子なれば、かたみともこそ思ふべけれ」と、志ひて、とゞめ給ひけれども、すこし、れとなしくなりなば、よも、近づけ給はじ、をさなくありなむ時、参りてこそと、志きりに、のぞみければ、力、れよび給はて、常に、身をはなち給はざりし刀を賜ひて、これにて、本意とげよ」とて、阿部野まで、人あまたそへて、やらせけるに、それよりは、我にひとしき童一人を具して、赤坂の城にゆきて、そのほとりに、たゞずみてありけるを、兵庫介忠元が、見つけて、いかなる人

にかれはすらむ」と、尋ねられて、われこそは、大夫尉光範の侍にて、宇野の六郎といひけるものゝ、小子に、熊王といふものにて候へ。父にて侍る六郎は、去にし時、住吉の戦に、うたれて候ふを、一門にて侍る備後守が、我をれひうちて、領地を奪ひ候へども、光範と心を合せ候へば、せむかたなくて、いかなる寺へも入り侍りて、僧法師にもなり、父のあとを吊ひ候はむがために、さすらへ侍り」と、いひけるを、あはれと聞きて、まづ、わがかたにともなひて、さまざま、いたはりて、後に、正儀に、ありつる事をかたりて、をさなくは候へど、心の、さかさかしく、てなど、申すに、あはれがり給ひて、召しよせ給へり。もとより、なさけある人なりければ、熊王も、れもひつきて、親のあだを

も忘れにけるにや、よく宮仕しけり。十五程になりければ、河内の國にて、すこしなる所を去らさむといひけれども、恥ある一矢をも射さぶらひてこそ」とて、辭しにけり。

あくる年の春、父が七めぐりに當りけるに、思ひつけて、こよひ、正儀を撃ちて、父の手向にもし、光範の心をもやすめ奉らむと、思ひたちてありけるに、その日、御前に召して、「今日は吉日にてあるなれば、元服せよかし」とて、和田和泉守にもとどり、とりあげさせて、和田小次郎正寛と名のらせ、吉野殿より賜はせける鎧を賜ひければ、涙を袖にかけてよるこぶ。夜に入るまで、正儀の御前にありけるが、又、ふと思ひ出て、撃ち奉らむならば、こよひこそと思ひて、膝をれし直して、正儀に、

目をかくれば、年ごろの情深かりしこと、今日の元服の事など思ひつゞけて、いかで、情なく撃ち奉らむと思ひかへして、心を去づむれば、父の敵といひ、譜代の主君のあだといひ、一かたならねばと、思ひ定めけれども、何心もなくわたらせ給ふありさまを見ければ、御いたはしくて、堪へかねけるにや、廣椽に出でて、聲をあげて、泣きさけぶを、人々も、正儀も、おぼつかなく思ひ給ひて、障子を開き見給へるに、ふし去づめるさまの、たゞには見えざりければ、「いかにか」と、問はせ給ひければ、ありつる心のうちを申して、「とにかくに、君のため、父のため、にみづから、死なむより外は、候はず」とて、刀をとりなほせば、ありつる人ども、皆、涙にくれてありながら、「いかで、さ

はあらむと、とりつきて、はたらかせねば、力れよばで、その刀にて、もとゞりれしきり、往生院にて、形をかへ、君より賜はせる名なればとて、正寛法師とぞいひける。寺の傍に、草の庵を結びて、もしも、心のかはることのありもやせむとて、往生院の門の外へは、出でずして、行ひてありけり。光範より賜はせる刀は、ありしありさまを、委しく、書きそへて、かへしけりとかや。いと、あはれなりける事にこそ。吉野拾遺

一八、空行く雁

新玉の年立ちかへり、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。ある夕ぐれ、箱王は、母の膝の上にたはぶれながら、いか

に、母御前、父は、いづくにれはしますぞや。その佛は、何國にましますぞや。行きて、をがみ奉らばや。母御前、いざさせ給へ」と、いひければ、はるかに、わすれたる。こし方も、今さら、思ひいだされて、きえ入るばかりに、れもはれて、母、なくな、のたまひけるは、あの曾我殿こそ、己等が父にてあれと、心づよく、かたられけれども、涙にむせびて、陳じやるかたぞなかりける。箱王、かさねて、申しけるは、父御前は、まことやらむ、狩場より歸り給ふ道にて、工藤一郎とやらむに射られ、死に給ひぬと、兄御前は、語らせ給ふぞや。當時、鎌倉殿のきりものにて、鎌倉より、伊豆へ下る時もあり、伊豆より、鎌倉へ上る時もありとや。われ等をも、殺さむとや思ふらむ。われ等が、この里にありと

知らずや過ぐらむなどと、れとなしく語りければ、母よりは
じめて、女房だちまで、皆袖をぞまほりける。
かくて、夏も過ぎ、秋もたけ、九月十三夜（秋分）の月、隈もなかりけ
るに、兄弟二人庭に出でて、遊びけるに、五つ連れたる雁金の
南をさして飛びけるを見て、一萬申しけるは、「あれ、見給へ、箱
王殿空に飛ぶつばさも、皆別の翼（羽）ぞまじへざりける。五つ、つ
れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあ
るらむ。物いはぬ鳥類さへ、かくのごとし。われらは、人倫に生
れながら、和殿は弟、我は兄、母は、まことの母なれども、曾我殿
は、實の父にてましまさぬこそ、かなしけれ。わが父をば、河津
殿と申してありしとかや。父だにも、世にねはしまさば、馬鞍

をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに、物を射ありき
なむ。われわれより、幼き者にて、馬鞍弓矢をもて、物を射あ
りく事の、羨しさよ。これらの事ども、思ひつゞくれば、いつよ
り、今宵は、父御前のこひしくねはしますぞや」とて、袖に、顔を
さし入れて、さめざめと、泣きければ、弟も、こざかしく、顔を合
せて、泣き居たり。一萬の乳母の女房、これを聞きつゝ、「あな、淺
まし。人もこそきけ。いかに、和上郎達、夜も更けぬるに、さやう
にては、ねはするぞ。とくとく、入らせ給へ」と、怖しげにいひけ
れば、二人のものは、門外へ逃げ出でて、れもふやうに、飽くま
で泣きて、後に、内に入りにつけり。（曾我物語）

一九、懷舊

○

あわ雪の消えにしあとを、たどるまに、

清水濱臣

としもはやつむはるの七くさ。

○

よそにとぶほたるを見て、影見えぬ、

本居宣長

たまのゆくへや、戀しかるらむ。

○

目にこそは、よし見えねども、なき人の、

本居春庭

ねとだにかよへ。庭のまつかぜ。

○

れもかげも、見しよに似たる、秋なれば、

村田春海

月のかゝみも、むつまじきかな。

○

あかざりし、そのよの月を、志のぶれば、

荷田蒼生子

むなしき空に、木がらしのこゑ。

二〇、昔話四章

一、登仙法師

河内國、金剛寺とかやいふ山寺にありける僧の、松の葉を
食ふ人は、五穀を食はねども、くるしみなし。よく、食ひれほせ

つれば、仙人となりて、飛び行くといふ人ありけるを聞きて、松の葉を好き食ふ。誠に、食ひれほせたりけむ、五穀の類、くひのきて、漸く、兩三年になりけるに、げにも、身も軽くなる心地しければ、弟子どもにも、われは、仙人にならむとするなり」といひて、坊も、何も、弟子どもに、わかち譲りて、上りなば、仙衣を着るべし」とて、かたの如く、腰に、物をひとへ巻きて、出で立つに、「わが身には、これより外は、いるべき物なし」とて、年頃、秘藏して持たりける水瓶ばかりを、腰につけて、既に、出でにけり。弟子、同朋、名残を惜みて、悲び、聞き及ぶ人、遠近より、市の如くに集りて、仙に登る人見むとて、つどひたりけるに、この僧、片山のそばにさし出でたる巖の上に登りぬ。一度に、空に登

りなむと思へども、近く、まづ、遊びて、事の様、人々に見せ奉らむとて、「彼の巖の下より、下に生ひたりける松の枝に居て、あそばむ」といひて、谷より生ひ上りたる松の上、四五丈ばかりありけるを、さかさまに、飛ぶ。人々、目すまし、哀をうかべたるに、いかゞまつらむ、心や臆したりけむ、かねて、思ひしよりも、身、重く、力、うきうきとして、よわりにつければ、飛ばずして、谷に落ち入りぬ。人々、あさましく見れども、これ程の事なれば、やうあらむ、定めて、飛び上らんずらむと見る程に、谷の底の巖にあたりて、水瓶もわれ、わが身も、散々に、うち損じて、唯、死に死ぬれば、弟子、眷屬、騒ぎ寄りて、「如何に」と問へど、返答もせず。僅に、息の通ふばかりなりけれど、とかくして、坊へかき入

れつ。こゝに、集れる人、笑ひ詈りて、歸りけり。さて、この僧、あるにもあらぬやうにて、痛み伏せり。とかく、いふばかりなくて、弟子も、はづかしながら、あつかふ間、松の葉ばかりにては、命生くべくも見えねば、いみじく、食ひのきつる五穀をもて、さまたま、いたはり養へば、命ばかりは、生くれども、足手腰もち折りて、起居もえせず。今は、松の葉食ふにも及ばず、本の如く、五穀むさほり食ひて、弟子どもに、ゆゝしく譲りたりし、坊も寶も取り返して、かゝまり居たり。仙道に至る人、たやすからぬ事なり。千訓抄

二、斷食法師

むかし、久しく、れこなふ上人ありけり。五穀をたちて、年來

になりぬ。御門きこしめして、神泉院にあがめすゑて、ことに、尊み給ふ。木の葉をのみ食ひけり。ものわらひする若公達あつまりて、この聖の心、見むとて、行きむかひて見るに、いと、たふとげに見ゆれば、「穀ぢち、いく年ばかりになり給ふ」と、問はれければ、「若きより、たち侍れば、五十餘年にまかりなりぬ」と、いふを聞きて、一人の殿上人のいはく、「穀ぢちの尿は、いかやうにかあらむ。例の人には、かはりたるらむ。いで、行きて見む」と、いへば、二三人つれて、行きて見れば、穀尿を、多く、まりれきたり。あやしと思ひて、上人の出でたるひまに、「居たる志たを見む」といひて、たゞ、みの下を、引きあげて、見れば、土を、すこしほりて、布袋に、米を入れて、れきたり。公達見て、手をたゞきて、

「穀糞聖、穀糞聖」とよばはりて、のゝまり笑ひければ、逃げ去りにけり。その後は、ゆきがたも知らず、ながく、うせにけりとなむ。(宇治拾遺物語)

三、連歌法師

「奥山に、猫またといふものありて、人を食ふ」と、人のいひけるに、「山ならねども、これらにも、猫のへあがりて、猫またになりて、人取る事はあなるものを」と、いふ者ありけるを、なに阿彌陀佛とかや、連歌しける法師の、行願寺の邊（まぎら）にありけるが、聞きて、一人ありかむ身は心すべき事にこそと思ひけり。頃しも、小川の端にて、音に聞きし猫また、あやまたず、脚の下へ、ふと寄り來て、やがて、かきつくまゝに、頸のほどをくはむと

す。肝、心もうせて、防がむとするに、力もなく、足もたゞず。小川へ轉び入りて、「助けよや、猫またよや、よや」と、叫へば、家々より松どもともして、はしり寄りて、見れば、この邊（まぎら）に見知れる僧なり。こはいかに」とて、川の中より抱き起したれば、連歌の賭物とりて、扇小箱など、懷に持ちたりけるも、水に入りぬ。希有にして、助りたるさまにて、はふはふ、家に入りにけり。飼ひたる犬の、暗けれど、主を知りて、飛びつきたるなりとぞ。(徒然草)

四、弓取法師

あるところに、強盜入りたりけるに、弓とりて、法師をたてたりけるが、秋の末つ方の事にて、侍りけるに、門のもとに、柿の木（かき）のありける下に、この法師、かたて矢はげて、立ちたる上

より、うみ柿の落ちけるが、この弓とりの法師が頂にれちて、つぶれて、さんざんに散りぬ。この柿の、ひやひやとしてあたるを、かいさぐるに、何となく、ぬるぬるとありけるを、はや、射られにたりと思ひて、臆してけり。かたへの輩にいふやう、「早く、いたでを負ひて、いかにも、のぶべくも覚えぬに、この頭うて」といふ。いづくぞ」と問へば、「頭を射られたるぞ」といふ。さぐれば、何とは知らず、ぬれわたりたり。手に、赤く、物つきたれば、實に、血なりけりと思ひて、さらむからに、けしうはあらじ、ひきたて、行かむとて、肩にかけて、行くに、「いやはや、いかにも、のぶべくも覚えぬぞ、たゞ、はや、首を切れ」と、頻に、いひければ、いふに隨ひて、うちれとしつ。さて、その首をつゝみて、大和國

へ持ちて行きて、この法師が家に投げ入れて、まかまか、いひつることゝと、とらせたりければ、妻子、泣き悲みて見るに、更に、矢の痕きずなし。むくろに、手ばし負ひたりけるかと、問ふに、「まかにはあらず、この頭の事ばかりをぞいひつる」といへば、いよいよ、かなしみ悔ゆれども、かひなし。臆病は、うたてきものなり。さやうの心ぎはにて、かく程のふるまひしけむ、れるかさこそ。(古今著聞集)

二一、尼法師 その一

今年五月十五日、彰義隊戦死の諸輩のために、二十七年忌の法會を行ふと聞えたれば、今日の法會にあひ、香華をも手

向けて彼の冥福を助けむものをとて、午過ぐる頃より、上野谷中に詣でぬ。

さて、法の如く、その法會も畢りて、寺を出でけるに、初夏の候とて、日脚の永くして、未だ、黄昏には、三四時間もありぬと覺えければ、この次に、山郭公の音づるゝをも聞き、卯の花の咲き出づるをも眺めばやと、思ひ定めて、歩を進め、根岸の里を、うち過ぎ、三河島の郷の方へ赴きたり。一叢茂る森の中に、古寺の家、峰の樹間より見ゆるが、何となく、ゆかしく思はるるまゝに、畔道を廻りて、寺の門に入りて見れば、もとより、大きからぬ本堂の、半荒れて、古びたるに、人の影も見えず。右の方には、樹木の一むら茂れるがありて、こゝは、この寺の榮え

し頃、數奇を極めて、築きたる庭園の跡なりとれほしく、藻草の生ひ茂れる池も、夏草の蔓れる阜も、その餘情をとめて、中々に、見所あり。

かくて、この庭を過ぎて、生牆の外に出でたれば、こゝは、卵塔場にて、苔蒸したる墓の碣、累々たり。そが中に、西の隅の方にあたりて、ひともの、桁の木の下に、小さき土饅頭を築き、その上に、一個の地藏尊を安置したるがありて、その尊像の石も、臺石も、はや、古色を帯びたれど、苔も蒸さず、傾きもせて、周圍には、雜草ひとと生さず、いと、きよらに掃除して、花立には、檜の葉を供へ、中央の香爐には、線香を焚きたり。

この尊像の前に、一個の尼法師の、年の頃は、四十七八歳に

もあらむ顔には、皺の波を寄せたれど、その面容眉目極めて、
きよらかなるが、肌には、鼠木綿の袷衣を着、墨染の麻の衣を
纏ひ、香染の麻の袈裟をかけて、稿蓆の上に、端然として座せ
り。夕日影焼くが如くなるをも、更に、いとはず、小さき折本の
御經を、兩手に捧げて、まめやかに、無量壽經を讀めるが、節も
亂れず、聲もすみ、いと、たふとく聞えたり。尼法師の後には、
二人の幼き子あり。一人は、七八歳ばかりの女子にて、一人は、
五六歳ばかりの男子なり。ともに、いとれとなしやかに、楓の
ごき手を合せて、彼の地藏尊を拜み居たり。

事の體、何かは知らねども、由ありげに思はれたれば、生墻
の邊に、身を寄せて、暫く、うち見たりけるに、彼の尼法師は、讀

牙二博始

經を畢へて、靜に、經を納め、念珠をれしもみて、口の中にて、佛
名を唱へ、さて、後を振りむきて、二人の兒女に向ひ、いざ、御別
の禮拜せよと、誨へ、ともどもに、うなづきて、名残をしげに、そ
の前を立ち、みづがら、水桶と蓆とを、左右の手に持ち、兒女を
伴ひて、庫裏の方へ赴きたり。

余は、この尼法師の體、いかにも仔細ある事と、れもひたれ
ば、二日を経て、十八日といふに、再び、彼の寺に赴き、住持の老
僧に面會して、彼の地藏尊の由來、かつは、かの尼法師の事を
たづねたるに、老僧は、はたと膝をうち、よくこそ、御たづねあ
りたれ。いで、その仔細、つぶさに、語り聞かせ、參らせむとて、説
き出しぬ。

過去を顧みて、指を屈へば、はや、二十七年の昔話とはなり
 て候ふ。頃は、慶應四年(明治元年)五月十五日の事なりしが、
 曉方より、雨、止めやかに降りきて、世も、何となく、心細く思
 はれたるに、上野東叡山の方に當りて、俄に、烈しき砲聲起
 れり。何事ならむと、うち驚きて、門外に走り出でて見れば、
 白き烟は、森を隔て、こゝかしこに、たち上り、鬨の聲、喇叭
 の音など、近く聞ゆ。すはや、上野には、合戦のはじまりたる
 ぞや、御山にたちこまれる彰義隊をば、官軍が、總攻には志
 つるぞや。早う逃げよ、疾う走れよ、流弾にあたつて、怪我な
 せと、男女老弱の別なく、われさきにと、轉びつ、轆びつ、西
 へ北へと、逃げ走れるなど、修羅の衢を、眼前にあらはせり。

あまりの怖さ、恐しさに、拙僧は、急ぎみづから、寺門の扉を
 さし固め、あはれ、戦争の狼籍を免れさせ給へ。寺中に候ふ
 人々の命の無事を守らせ給へと、本尊にねぎ奉りて、事の
 はつるを待つ外に、また、他事なく候ひき。
 さても、その日の未下る刻に、勿體なや、東臺の山門、中堂、本
 坊をはじめとし奉りて、一山の堂塔伽藍皆、劫火のために、
 黒烟となりて、炎上なし、見る眼も、そら恐しくて候ふ中に、
 落武者の後を追ひかけて、彼方にては、射て殺し、ぞ、此方
 にても、打ち取りしぞと、門外にて、ゆき、もの、噂す
 るが、手に取るやうに聞えたり。
 かくて、申過ぎたりと思ふ頃、庫裏の後に當りて、人の呻き

苦む聲のたゞならず、聞えて候ひければ、れどろく心を
しまづめて、雛僧を召し具し、庭傳に、覗きて見れば、こはい
かに、一個の武者の、總身、血に染み、痛手、あまた、負ひて、息も
たえだえなるが、裏手の、塙根の隙を、れしやぶりて、逃げ入
りたりと見えて、松の樹の下に、倒れ伏して居たり。いそぎ、
寺男ども呼びあつめて、その武者をひきれこさせて、介抱
しけるに、年の頃は、二十五六歳ばかりなる若武者にて、日
の丸の袖章つけたるは、きこゆる彰義隊の一人とは知ら
れたり。

若者は、寺男が與へたる茶碗の水を、一息に、呑み乾して、御
情、忝く候ふ。とても、もの事に、早く、わが首打ちて、この苦痛を

免れさせ給へ」といふ。拙僧、聞きて、思ひよらざることを、の
たまふものかな。法師の身にて、いかで、人の命を絶つ法や
ある。追手の來ぬ間に、とくとく、落ちさせ給へ」と、勸めたる
に、彼の武者は、首、うち振りて、いないな、今日の合戦、敗北の
上は、わが一命、もとより、徳川の御家へ、捧げ奉り候ふ覺悟
なれば、今更、いづちへか、落ち候ふべき。たゞ、名もなき陪臣
どもに、首を取られ、徳川家の砲兵組頭塙采女信繁をば、何
某の若黨が、打ち取りたりと、名乗られむこと、屍の上の恥
辱なれば、心靜に、生寄せむとて、追つ取り、卷いたる官軍の
むらがる中を、たゞ、一人にて、うち破り、根岸口より、こゝま
で、落ち延びて候ふが、今は、腹かき切らむにも、痛手に、心届

かねば、この上の御芳志には、御引導の御介錯を頼み參らせて候ふなり。苦痛を救うて、活す事も、又、殺して、苦痛を免れさするも、同じ佛の慈悲にては、れはせずや。誰にてもれはせ、いざ、この腰刀にて、僕が細頸、うち落して給へよと、望めども、「介錯せむ」と答ふるものは、一人も候はざりき。あな、いひがひなき人々かな。さらば、苦痛を忍びて、みづから、生害いたし申さむ。引導して給はれよ。最後の様の見苦しとて、笑はせ給ふなと、いふまゝに、腰なる短刀抜き持ちて、拙僧が授けたる十念を、高らかに、唱へながら、おのれと、咽喉つきて、絶え入りけり。

この遺骸、いかにすべきか、市の廳へや訴ふべき、里正へや

告知すべき、いかゞはせむと、一寺のもの、うち寄りて、評議したりけるが、拙僧は、人々に向ひて、この塙某とやらむいへる武士が、わが寺の境内にて生害し、はからずも、われらが念佛の引導を受けて、往生したるも、淺からぬ因縁ぞかし。然るを、いま、その屍をさらさむこと、罪業、最も、深かるべし。後日に至り、公の咎あらば、拙僧一人の身に引き受けて、いかなる御沙汰をも蒙らむ。屍は、境内の卵塔塙に葬り埋めて、ひそかに、（おぼろげに）回向供養こそ致すべけれと、のべたりければ、皆、これに同じて、共に、力を合せ、その夜の中に、如法の沐浴せさせ、經帷子（きんゐし）に着かへさせて、棺に納め、讀經引導の式を、密々に、執り行ひて、さて後に、柩の木の下に、そと、葬りて、

she is your lover, because
she seems to very like you and
your only acquaintance, and you
also very love ~~her~~.

その遺骸を隠して候ひき。

二二一、尼法師 その二

老僧は、盞茶を余にすゝめ、れのれも飲み、咽喉を濕し、更に物語をつゞけぬ。

明くれば、同じき十六日の午頃、拙僧に、面會を望める一個の女性あり。座敷に招じ入れて、對面したるに、その人は、十八九ばかりなる、すぐれて、うるはしき女性なるが、單衣の裾高く端折り、胸高に、帶引き結びて、かひがひしく、いでたち、眼中、血走りて、半、ものに狂へる如き顔色をあらはしたれども、みづから、心を制してや、行儀正しく、初對面の挨拶

をなし、詞靜に、「卒爾にては侍れども、昨日、この御寺に落武者の參られて候はずや」と尋ねられたり。拙僧はたと驚き、胸うち騒ぎしかど、明らさまにいふべき事ならねば、「いな、いな、さる事は、候はず」と、事もなげに、答へたり。いなとよ、上人、御隱あらむは、罪深う候へ。わらはこそ、その落武者の由縁の者にて候へ。彼の人の行方、生死の程を尋ね究めむとて、朝まだきより、上野、谷中、根岸と、彼方此方を尋ね廻りて、こゝまで、參りて候ひしが、はからずも、この御寺の後の塙の外にて、かく、燧袋を拾ひて候ひぬ。この袋は、わらはが、手づから縫ひて、彼の人の短刀の栗形に、紐もて結び附けて、參らせし品にて候ふなり。かゝる證據の候ふを、隠させ給

ふは、中々に覺え候ふ。あかさせ給へ」とありければ、「時機に
よりては、うちあかすべきが、去て、その殿の假名、實名は」と
問ふに、「うたてや、御僧かの人の生死のほごも知れぬうち
に、その名を、輕々しく、申さむや」と、いふげに、尤の御答よな。
さらば、もしも、その殿、官軍のために、討たれ給ひぬと申さ
ば、いかに。「それこそ、嬉しう候はめ。討死は、かねての覺悟に
て候ひつるものを。」雄々しき御覺悟、あつばれ候ふ。但し、そ
の殿は、拙僧のはからひにて、昨夜、官軍の手に降參せられ
て候ふぞ。「いないな、彼の人に限りては、力盡きて、生捕にせ
られたりとならば、いさ知らず、手を束ねて、降參するほど
の、腰拔武士にては候はず。」さ、のたまふ上は、告げ參らせ

つて、
いさ知らず、
手を束ねて、
降參するほど
の、腰拔武士にては候はず。

む。誠は、昨日の夕、この寺にて、生害して、はて給ひて候ふ。そ
れは、定にて候ふか。去て、その證據は、御覽に入れ參らせむ
とて、彼の肌着、太刀など、二品三品見せたりければ、女性は、
兩眼にせき來る涙を、その遺念の肌着にて、ぬし拭ひ、去ば
し、泣き入りしが、やがて、氣を勵して、覺悟の上とは、申しな
がら、良人の生害と承りて、心のみだし、拙きさまをあらは
し、耻しうこそ候へ。今は、何をか包むべき。その武士こそは、
妾が二世までもと契りたる夫にて、去かも、旗本八萬騎の
その中に、三河御譜代の家柄と知られたる、塙采女信繁と
申し、ものにて候ひしなれ」と、あかしたり。拙僧も、「この上
は」とて、乞はるゝまゝに、昨日、落武者が最後の體ども、落も

なく、物語りたるに、女性が歎の中の喜は、良人が最期のををしかりしと、臨終の砌に、拙僧の導に値遇せしとの事にして、引接の悲願空しからず、攝取不捨の光明に、黄泉の涙を照されて、彌陀の浄土へ赴き給ふ事の、ありがたさよと、幾度ともなく、伏し拜みては、泣き、泣きては、伏し拜みて候ひき。

その後、この女性、七々日、その間は、忍びやかに、毎日、佛參して、怠らず。中陰、百日の法會も、人目にたゞざる様にとり行ひ、その後、若干の黄金を持ち來りて、亡夫の石碑を建てむことを乞はれしが、朝敵たるもの、墓碣を建てむこと、公への憚ありければ、わざと、地藏尊の像を彫ませて、標

中陰、二十日、
百日、中と云ふ

となし、なき人の戒名は、位牌に記して、わが寺の過去帳にも、書き入れ置き候ひき。

かくて、女性は、その翌年、亡夫の一周忌と申し、時に、一人の孩兒を懷きて、參られしが、さても、この娘こそ、亡夫のわすれがたみにて、昨年、七月、誕生いたして候ふなり。夫が最期の砌に、直に、佛の道に入らばやと存じ候ひしが、今日まで、ためらひしは、この故にて候ひしぞとて、やがて、拙僧を招じて、導師とたのみ、十九歳と申し、に、緑の黒髪をば、煩惱の雲と、もに切り拂ひ、かくて、夫の實名の一字と、れの名の兼といふ字とを合せて、法名を、信兼尼とは、附けたり。

喜 喜 喜 喜 喜
花の枝

その後この尼法師は、道德堅固に修行をなしたりしが、二十餘年の勤學、そのかひありて、今は、一宗の長老上人たちも、をさをさ、れよばぬほどの碩學とはなられたり。東京にればする時は、毎月三四回は、必ず、墓參を怠り給はず。たまたま、錫を飛ばして、諸國を修行し給ふにも、五月十五日には、必ず、歸り來りて、法の如く、詣で給へり。足下が見給ひしは、即ち、その參詣にては候ひけるぞや。また、その時に伴ひ給ひし二人の兒女の、一人は、その孫、一人は、實家なる某といふ人の娘なり。兩家とも、由縁の人の、あらざれば、ひきとりて、尼法師の養ひ育て居給ふなりとなむ。

右は、老僧の物語なり。この尼法師の上につきては、なほ、聞き

たる物語もあれど、あからさまに、いひあらはさむは、尼の意にもとるれそれありと、老僧のとゞめられたれば、こゝには記さず。(福地櫻痴文稿抄録)

二三、短篇四章

一、杜鵑を聞く記

鳥魂 野
不如歸 杜宇

賀カ 賀

賀賀

庚子四月十五日の朝、杜鵑はじめて鳴くを聞く。立夏後十日なり。去年は、立夏の日より鳴きぬ。今年は、去年より十日、後れたるは、季候の遅速あればなり。われ、この鳥の聲を聞く毎に、故兒琴嶺のことを思ひ出でて、悵々たり。物によりて、懷舊の情あること、皆、去かり。景によりて、情起り、情をもて、景を思

鳥魂 野
不如歸 杜宇

ふ。もろきは、人の心なるかな。龍澤馬琴文稿

二、鯉の圖に題す

千尋の瀧に臨むいきほひ、やがて雲をれこし、雨を吐くらむと、いさまし。されど、すゝむ心にまかすにはあらで、年月あまた身を守り、勉めて怠らざるが故に、かゝる時をも得にけむ。本たちて、道なる」とこそ、かしこき人も、のたまひたれ。あな、たふと。(伴蒿蹊著 閑田文章)

三、魂祭の題辭

初秋の魂祭るとて、「なし」をもて、「ありのみ」と呼べるこそ、あはれに、深きことわりにあなれ。いつの誰がまことより出て、かく、たふときならはしとはなりけむ。(三宅石庵文稿)

四、砧を聞く詞

近しと聞けば、遠し。遠しと聞けば、近し。まきるも、たゆみ、たゆむも、また、まきる。雁がねの聲の、きぬたを、さそふに、やあらむ。きぬたの音の、雁がねにかよふに、やあらむ。あな、あやし。あな、あやし。そもそも、この音の、かなしきか。住むさとのさびしきか。うつをりの、うきゆるか。みな、あらず、聞く人の、心のさびしきなり。(清水濱臣著 泊泊舎文集)

二四、運命

世の中の出来事の、來りて、われわれの運命を左右するもの、その數、日に、百千のみならず。然れども、われわれが、これを

認め得るは、たゞその表面に顯はれ、實際に、結果を生ずる一半のみ。その來りて、殆ど己の上に附着せむとして、遂に、附着せず、そのまゝに、消えゆく出來事は、また、實に、れびたゞし。もし、われわれが、そのわれわれの運命を左右する、出來事を認むるのみならず、更に、また、まさには、われわれの運命を左右せむとしては、空しく消えゆく、暗々裡の出來事を認め得むには、われわれの生涯の望と畏とは、まことに、無限無邊ならむ。ダビッドのこと、以て、見るべきなり。

われわれは、ダビッドの既往を知らず、また、知るをもちあらず。われわれは、いま、たゞ、二十歳の少年、はじめて、故郷の田舎を難れ、ボーストン府にゆき、商家の手代とならむとする途上

にある彼を見るのみ。彼の履歴は、小學校れよび、中學校にて、ひとゝほりの教育を受けたりといふのみにて、事足るべし。田舎少年の心やすさは、車も借らず、馬も借らず、日出よりあるき出して、既に、日中に至れり。時は、これ、夏のなかば、漸く、覺ゆる疲勞と、ますます、くはゝる暑熱とは、彼をして、かたへなる樹蔭に休息し、乗合馬車の過ぐるを待ちて、これに投ぜむと、決意せしめたり。

鬱葱たる幾株の喬木の丘の上にたちならび、ほとりには、また、きよらかなる泉の水の湧きいづるあり。たとひ、ダビッドならぬも、往來の人、誰か、この日中に、この樹蔭にあひて、ひとたび、憩ふことをれもはざらむ。ダビッドは、まづ、泉の水に、かわ

きたる喉を潤し、れもむろに、負ひたる包を解きれるして、その上に、つぎはぎせる木綿の手拭を重ねかけ、これを枕として、仰臥せり。太陽の光は、うちかさなれる枝に遮られて、ダビトの身にいたらず、往來の路は、昨日の大雨に濕ひたれば、まだ塵を飛さず、れひ茂れる緑の草は、絶好の蓐よりも、こゝろよく、柔なり。泉の水は、沸々として、常に、耳邊に鳴り、縦横せる枝は、そよふく風のためによりより、微搖するのみ。ダビトは、たちまち、心、陶然として、恍惚たるうちに、身は、いつか、うまいの裡に落ちぬ。

ダビトは、樹蔭に眠りゐたるも、途上には、さめたる人、なほ、少からず。或は、馬に跨り、或は、車に乗り、また、或は、あゆみて、ダ

ビトの前を來往するもの、ト點々たり。或者は、わき目もふらず過ぎゆけば、彼の、こゝにあることをも知らざるなり。或者は、たまたま、彼の、こゝによこたはれるに、ト寓目するも、トれのが心の忙しき思念に蔽はれて、別に、意もとめず、ト過ぎゆくなり。或者は、彼の無邪氣に眠れるを見て、笑ひつゝ、去るもあり。或者は、その道傍に眠れるを卑みて、眉志かめつゝ、ゆくもあり。非難、稱羨、一讚、一譏、すべて、トダビトにあつまれり。

やがて、一輛のはてやかなる輕車ありて、毛色うるはしき二頭の馬をつなぎ、ト隣々として、馳せ來れるが、この木立の前に至りて、突然、とゞまりたり。そは、一本の轄トゆるみて、一個の輪に、くるひを生じたればなり。車中にありしは、商人夫妻に

て、齡高く、品よき人なりき。老夫妻は、從者が輪を整ふる間、樹
蔭に憩はむとて、たちよりたるが、その下に、ダビッドのよこた
はれるを見るより、俄に、れどろきて、二三步、後にさがりたり。
ためつ、すがめつ、志ばし、凝視し居たりしが、やがて、心を安じ
たりけむ、このうまいせる少年を驚さるるやう、志のび足し
て、ふたゝひ、樹蔭にたちよりつゝ、夫は、妻に低語せり。あのこ
ころよげに眠れるさまを見よ。あの呼吸する氣息の、極めて、
容與なるを見よ。これ、健康にして、心やすらかなるものにあ
らざれば、能はざるなり。もし、余をして、かゝるうまいを得し
めば、余は、わが歳入の半を割くも、をしからじ。妻は、今、風のた
めに、一方の枝のれしやられ、一條の太陽の光、少年の面に漏

れそゝぐを見て、自ら、手を伸べ、もつれたる枝を解き、これを
蔽ひやりながら、また、夫に低語せり。天は、この好少年を、われ
われに興へ給ふと見ゆるなり。われわれが、從弟の子の所行
に失望せる後、偶然、この樹蔭にたちよりて、この少年に邂逅
するは、まことに、不思議の遇ならずや。かつ、熟視すれば、なに
となく、面ざし、逝きしヘンリーに肖たるやうなり。試に、彼を
呼びさまさむか。夫は、うち案じて、「そは、何のためぞ、われわれ
は、まだ、少年の素性をも知らずして」と、いへば、妻も、やゝ、まど
ひながら、なほも、れもひ入りて、「さりながら、かの無邪氣なる
容貌、かの無心に眠れる姿よ。」

今や、一個の莫大なる福は、ダビッドの上に臨めり。この老夫

妻は、たゞ、ひとりの子、ヘンリーをさきだたせ、家に蓄へし巨萬の富は、相續せさすべきものもなく、せめては、遠き従弟の子にと目ざして、これを尋ねしに、その子は、所行不良にして、心に適はず、いま、失望して、ボーストン府に歸るなり。人は、かゝる時に當りて、さまざまの想像をも、畫くものなり。妻は、ふたゝび、反覆せり。試に、呼びさまさむか。同時に、背後に、従者の聲あり。修繕整ひて候ふ。

老夫妻は、この聲に、忽焉として、われに復り、相携へて、車上に身を置けり。ダビッドは、なほ、駒々然アウツリに身を置けり。

老夫妻を載せたる輕車は、去りて、まだ、一里は行かざるべしとれもふ時、また、かなたより、飄々と、高く、趾を擧げつゝ、こ

こに來かゝりたる一個の少女あり。趾を擧ぐることの高きは、以て、そのやさしき胸に、心、れもしろく、跳ることのあればなるべし。いま、木立のほとりに來れる時、たまたま、靴の紐とけたれば、俯して、その紐を結ばむとして、ふと、かたへなる樹蔭を顧みるに、こはいかに、清き泉のほとりに、一個の少年ありて、うまいせり。少女は、れどろきて、もし、過ちて、この人をさますこともやと、いそがはしく、拔足して、はせ去らむとせり。をりしも、一個の大なる毒蜂の、羽うつ音さへれそろしく、ぶつぶつと、聲をながら、少年の顔のほとりを徘徊せるが、いまは、あはや、この眠れる少年の眉の上にとまらむとす。少女はこのありさまを見すてかねて、急に、紅絹の手巾をとり出し

The beautiful girl that did free from
the fearful bee.

て、これをうち振りつゝ、毒蜂をはるかあなたへ、逐ひはらへり。こは、これ、宛然、一幅の妙畫にあらざや。少女は、去ばし、少年の寝顔を凝視してありしが、やがて、自ら、低語せり、よくも、眠りたまへるものかな。

既にして、少女は、やうやう、身を起して、この樹蔭を出てゆけり。少女の父は、近傍の村に住める相應の商人にして、恰も、このごろ、ダビットの如き少年を求めをりしなり。もし、ダビットが、この少女と邂逅相識となりたらむには、少女の紹介によりて、その家に手代たらむこと、いと、容易なりしならむ。去かも、ダビットは、なほ、あつち 躰々然あつち。

少女の影、僅に、見えなくなるやならず、また、二人の人あり

て、この樹蔭にたちよりたり。木綿の頭巾を、目深に被りたれば、審に、見るべからざるも、顔の色、いたく、黒くして、衣服、粗野に、かつ、こゝかしこに、幾多の汚點さへ印しあり。こは、これ、この邊に徘徊する山賊にして、いま、その贓物をわかたむとて、この樹蔭に来れるなり。かくて、ダビットのよこたはれるを見るより、ひとり、はやくも、他のひとりを見て、汝は、あの枕にせる、包を見ずや」と、さゝやけば、ひとりは、されど、もし、目をさましたらばと、いふ。ひとりは、急に、懷中を探りて、匕首の柄を、少しく、あらはし、これのみと、いふ。やがて、ふたりは、ダビットのほとりに進みより、ひとりは、その匕首を抜き、胸に擬し、ひとりは、頭のかたにまはりて、その枕とせる包をぬかむとす。

そのふたりの顔もし、ダビトをして、目を開きて、見しめば、直に、以て、悪魔とやなさむ。この時、忽ち、一頭の黄犬あり、鼻をうごかして、頻に、地上をかぎつゝ、こゝに、走せ來れり。ひとりの賊は、目ばやく、これを見て、「やめ、やめ、かの犬の主人、ついで、こゝに來るならむ。」

ひとり、は、匕首を懷中に收りたり。ひとり、は、ブランドー一壘を取り出せり。仕事の、まさに、成らむとして、敗れたるを笑ひのゝしり、たがひに、幾口を飲むうちに、れのれの黒き顔に、一種の紅を生じ來れり。後には、ダビトのことをば忘れて、がやがやと、うち興じつゝ、相携へて、また、出でゆけり。まかも、ダビトは、なほ、駒々然。

一時間の眠は、ダビトの疲勞を醫し盡せり。ダビトは、すこしく、身動せり。徐に、その唇を揺せり。聲はなけれど、口の中に、ひとり、半殘の夢を語れり。をちかたに起る輪聲、既にして、殷々、既にして、轟々、ますます、近くして、ますます、高く、今や、轆轤として、尺寸の間に來れり。これ、一輛の乗合馬車なり。ダビトは、俄に、躍りて、起てり。こや、御者、こゝに、旅客あり。上層に席あり。ダビトは、馬車の上層に登り座せり。ダビトは、前途幾多の望をかけたる、樂しきポーストン府に馳せゆけり。かの清泉には、一顧眄の別をだになさず。

一たびは、富の神の、こゝに來りて、黄金の光、その水面に照射せることもありしは、ダビト、知らざるなり。一たびは、救の

マシカ
シカ

神の、こゝに來りて、その清流に、やさしき影をうつし、こともありしは、ダビト知らざるなり。また、一たびは、死の神の、ここに來りて、その水上に血を染めむとせることもありしは、ダビト、知らざるなり。嗚呼、彼は、生涯、遂に、これを知らざるなり。(森田思軒文稿)

二五、天才の末路 その一

とある朝、モンマルトル區なる、ステンケルク街といふところの、最も、卑しき貸部屋に遷れる人ありき。こは、藝人のカリフォルニヤと、聞えたる巴里に迷ひ來ぬる、ゲザ、ファン、ザイレンなりき。かれは、かの故郷を住みうくれもひて、佛蘭西には、

移りしなるべし。

汽車の中にて、邂逅あひまひし中音ちゆうおんうたひの男、この貸部屋をば、彼に教へき。こゝは、いと、靜なるところにて、勉強して、業を成すには、究竟なり」と、いへば、ゲザは、喜びて、その教に従ひぬ。ゲザは、今も、なほ、業を立て、名を成さむと、思へり。

むかし、ある貴族のれくりし、上等のヴァイオリンありしを、賣り拂ひて、かれは、千フランの金を懷にしたり。かのヴァイオリンを、千フランに賣らむは、ほとほと、途に投げ棄つるに、れなじと思ひき。されど、この巴里行は、身を立つる基とれもへば、樂器一つは物かは、れのが脉のうちを流るゝ血を賣らむも、たやすかるべし。

遠からずして、わが新作を出さむをりは、喝采の聲、雷の如くならむ。その時には、ステルニイも、わが前に俯して、頭をばえ擧げざるべし。

悲憤の念は、胸にせまりて、握りつめたる指の爪は、手の甲にも通るべきほどなれど、ゲザは、みづから抑へて、その氣色なかなかに、れちついで見えたり。

ステルニイが戴ける冠は、もと、これ、贓品なれば、まことの主なるわれ、今より勉めて、また、かくの如き著作を出さば、かの冠を、彼が頭上よりひき落さむこと、何條事かあるべき。いさゝかなる才を懷けるものにも、一生涯に、ひと度は、凱歌をうたふ時あるものなり。いはむや、われは、世の常の才にあら

ず、われには、天才あるものを。

巴里に移りてのはじめの日には、ゲザは、こゝちすがすがしうれほえぬ。中音うたひの男は、ゲザをうながし立て、まことの本通を、そゝるあるさせむといふ。ゲザは、大都の人ごみのところを、うるさしとれもひて、これをいなみ、中音うたひの、いそがはしげに、巴里の眞中さして行くを見れくりつゝ、れのれは、ひとり、バット、モンマルトルのかたに、足をはこびつ。

と見れば、まばらなる小公園を、丘の上に開けるありて、あやしげなる木造の梯をかけたなり。シム、セリセエ、バルク、モンソオなどにてあそぶ、華奢なる子供とは、ことにて、身は痩せ、

顔は垢つき、やれたる衣を着たる小兒、あまた、朱の如く、赤き砂道の上につどひたり。園のあなたは、あれちにて、石灰の塵を帯びたる草、ところどころに生えたるが、向のやれ家の檐下まで續きたり。巴里は、こゝより幾里かあらむと、疑はる。

ゲザは、園の中に据ゑたる、木の長椅子に、腰かけたり。行末は、職人になりて、人を罵る聲なるか、さらずば、卑しき女になりて、妾に、笑ふ聲なるかと、れもはるゝ小兒のもろごゑは、耳に満ちたり。かれは、この時に、限なき疲を覺えき。

若かりしほどは、故郷より巴里への旅をば、旅ともれもはざりしを、いかなれば、けふは、かく、疲れけむ。かれが頭は、やうやく低れて、胸についたり。このうたゝねの夢に、ゲザは、故郷

の公園なる、ねぶたげに、そよげる、木の下を、友と共に、そゞろあるきす。こゝには、大なる水たまりありて、あかき罌粟の花びら、二つ三つ、その上に浮び、青き空の色は、これに映じたり。かれは、友に向ひて、われには、まことの天才あれば、行末は、大なる業を成さむと、さゝやきぬ。

人の、われに寄り添ふと、れほえて、ゲザは、驚きて、醒めぬ。目の前には、袖つきたる、青き前垂して、白き帽子を被りたる小娘ありて、冷き指を、假寢したる人の手に觸れ、園は、はや、鎖さるゝに、醒め給はずや」と、いふ。

空には、アングルスAngelusの祈誓の鐘の聲、響きわたれり。ゲザは、たちあがりて、丘を下りぬ。物の腐るゝ、濕氣の臭、丘のほとり

より、たちのぼりて、きれぎれなる霧は、次第に、モンマルトルの貧苦の境を罩めむとす。

二六、天才の末路 その二

ゲザは、部屋に歸りて、燈を點じ、身ふるひしつゝ、一間の隅々に、眼をくばりつ。こゝの壁をば、もと、柑子色の地に、青き文をれきたる紙にて、張りしものなるが、單調なるよごれ色にぞ、今は、なりたる。一方には、灰色のカミン爐に、鐵のれほひしたるありて、その爐板の上には、素焼のいやなる人形、二つ据りたり。かの中音うたひの男の話に聞けば、この人形は、チオドリユイルといふ人の作なり。チオドリユイルは、いにしへ

ゲザ、Miyachi, T. Miyachi,

遺作、
遺作、
遺作、

遺作、
遺作、
遺作、

のミケランジュロにもれとらざるべき彫工なりしが、情なき公衆は、この天才を顧みざりきと、中音うたひ、いふに、「なに、天才ありきとか」と、ゲザは、この厭ふべき人形を見て、叫びぬ。かかるものを造りし男には、よの常の才だになかりけむものを。ゲザは、天才といふことばの、かくまで、濫に、用ゐらるゝを歎きぬ。

「さなり、さなり」と、中音うたひ答へき。世に、藝術の妙を知らせむとて、かれは、産を傾け、力を費したりき。はては、酔症になりて、酒に耽り、遂には、かゝる物のみ作るやうになりき。ゲザは、このことばを聞きて、身ふるひしつ。その人は、今いかにかなりし。自殺をや遂げつる。中音うたひ、「否、かれは、猶、世

にあれど、その業をば止めて、娘の世話になり居り。藝人の娘の、いかなるものなるかは、君も知り給はむ。昔は、親子の縁を断ちたりといひて、逐ひ出し、娘なれど、今は、その世話になりて、何事をも忘れたる如し。かれは、たゞ、娘の上をのみ忘れしに、あらず、世事をば、すべて、忘れはてたり。暖き部屋に居りて、をりをりは、アブサン酒一杯飲み、球突の戯するを、かれは、こよなき樂とせり。その宿は、オテル、ド、ナンシイとて、この街の隅なり。往いて見むとれも、ひ給はむ、明日、伴ひまゐらせむ。若き藝人共は、をりをり、かれに馳走して、をかしき藝術論を聞くことあり。

ゲザは、部屋に歸りて、先づ、れもひ出でたるは、オテル、ド、ナンシイに住めりといふ、ミケランジェロが事なり。ゲザは、爐板の上なる人形を、去ばし、うちながめてありしが、猶、よく見むものをと、その一つを取り、れるして、ほの暗きランプにさし付けたり。塑像を観る眼をも、ゲザ、さすがに、具へたれば、このあやしき人形にも、こゝかしこに、名匠の手の牙、残りたるを見出しつ。

ゲザは、覺えず、聲を放ちて、泣きぬ。持ちたる手の、いたく、震ひければ、人形は、床の上には、たと落ちて、そのまゝ、微塵になりぬ。されど、部屋の貸主は、ねうちあるものとれも、はねば、償を求めむともせざりき。

此處は、
ゲザの
部屋に
ある
人形
の
一つ
を
取
り
て
見
る
場
面
を
描
き
出
し
て
い
る
。

二七、天才の末路 その三

ゲザは、酒を絶ちしに、胸は志めらるゝやうにて、目の前には、紅の雲の團をなして、まるがりゆくあり。れそろしき疲に、身は、痺えたる如くなりき。されど、かれは、また、飲まむともせで、作譜にとりかゝりぬ。はじめのほどは、例のオペラの局を終ふも、遠からじとれもはれぬ。瞬く間に、書き終へたる譜の紙、身のほとりに、堆をなしぬ。勢づきて、たゞ、書きに書くほどに、忽ち、空想の絲絶えしかど、ゲザは、深くも、意に介せざりき。かく、製作の力、弛むことは、壯なる時にもありければなり。また、興の動かむをりまでは、志ばらく、鋭を蓄へて、今まで書いたるを、刪潤せばやとれもひて、試に、翻して見るに、こはいか

句
世中
生
少
ハ
ト
ル
フ

楽劇 形劇

に、われながら、通曉しがたきまで、妄なる節れほく、ところどころには、拍子の、全く、脱ちたるあり。地は、皆、きれぎれなりき。中には、めざましく、美しきところあれど、そは、いと、稀なれば、たゞ、これ、灰燼のうち、に残りたる立派なる斷礎にぞ似たりける。心にかゝるは、これのみならず、樂譜に用ゐる符標のうち、に、忘れたるもの、少からず。これをれもひ出さむとて、夜を通じて、藏書の中なる作譜論を閲し、あくる朝、また、始より書き改めなどすることありき。

造作もなき一小段をも、書きそこなひなきやう仕上ぐるは、堪へがたきまで、難義になりぬ。心を專にし、思を凝すやうなることは、もはや、及ばずなりぬとれほし。されど、ゲザは、骨

形
楽
劇
の
時
刻
三
五

をば惜まざりき。たゞ堪へ忍びてなせば、いつか出来あがる期あらむと、みづから志を勵すものから、生憎に紙の上に、たばしるものは、涙なり。

ゲザは、業の成らぬうちに、錢の盡きむことを恐れければ、節儉すること、甚しく、今は、柑子色の部屋より、屋根裏に引き移りぬ。食事も、日に、ひとたびとなしたり。

髪は、白うなりぬ。物いはむとすれば、口くち咄り、もの書かむとすれば、手慄ふ。(中畧)

ゲザが力は、次第に、衰へゆきぬ。脈の中をば冷えかゝりたる鉛の如き血、よどみながら流る。目の前には、いつも、塵舞へり、耳には、胡蝶の疲れて、羽うつ如き音聞ゆ。食、粗なれば、養、足

January January February

Sep 30th 1904

らず。つひには、暮につくやうになりぬ。

人よきゲザなれば、同じ家に住めるもの、一人として、氣毒がらぬはなし。部屋の貸主さへ、酷くは、扱ひ得ず。食を送りて、くはするものあり。臥床を整へて、寐さするものあり。新聞紙もて来て、貸すものあり。ゲザは、かゝる惠を受くるごとには、づかしげにほゝゑみ、遠方にのみ注ぎたる目にて、禮を陳べ、人去れば、半醒半睡の境に入れり。(森林太郎水沫集抄録)

中等國語讀本卷七 終

行きたりけり
行きたりけり
行きたりけり
行きたりけり

本行
本行
本行
本行

静

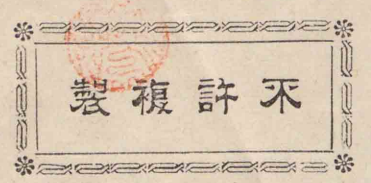
も
未
過
去
も
未
過
去
も
未
過
去

平岡治書院

明治三十四年十一月十五日
明治三十四年十一月十五日
明治三十五年二月四日
明治三十五年二月四日
明治三十六年二月二十日

定價表	
一、二冊	每冊貳拾貳錢
三、四冊	每冊貳拾四錢
五、六冊	每冊貳拾四錢
七、八冊	每冊貳拾四錢
九、十冊	每冊貳拾四錢

明治三十三年五月二十四日
中學校用文部省檢定濟



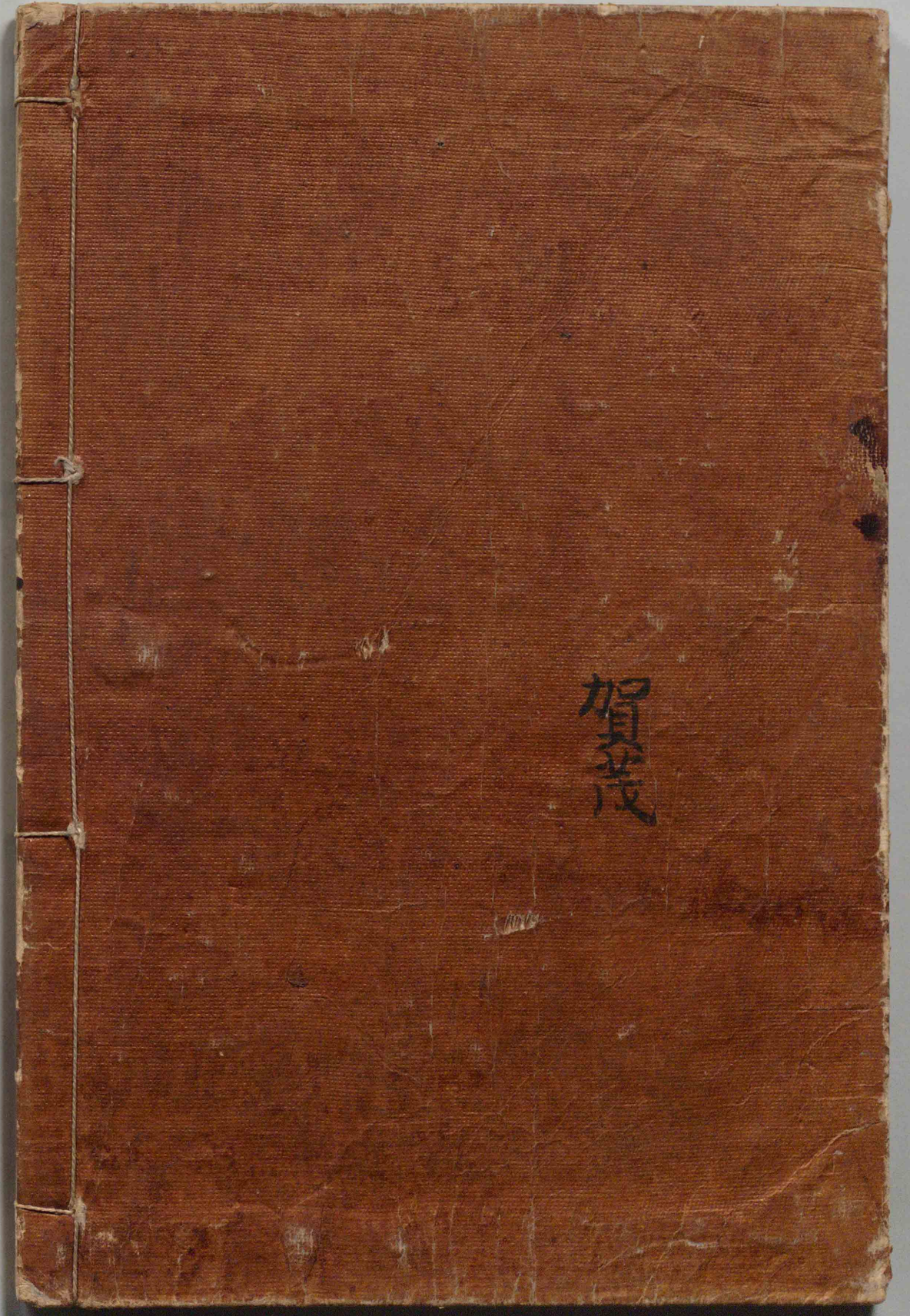
著者 落合直文
 發行者 三樹一平
 印刷者 新井豐造
 印刷所 明治印刷所

發行所 關西專賣

東京市神田區錦町一丁目
(特電話本局二四三八番)
大阪市東區備後町四丁目
(特電話東二四九番)

明治書院 吉岡平助

with my special key.
I have been using it for some time and it is very useful.



賀茂